

「事実は小説より奇なり」という。

それはそうだと、少女は嗤(わら)う。

事実、どんな文字書きであれ、彼女の視界を表現できまい。

だって、彼女の「観(み)る」世界を共有する人など、ただの一人もいないのだから。



夢の中で、炎が躍る。日常は全て、遠く彼(か)方(なた)へ行ってしまった。残ったのは黒い異形と、少女を責め立てる声。

「全部全部、全て！ お前のせいだ！」

老婆の声が鼓膜を震わせる。異形はいくつもの人型になって、少女を囲んだ。かごめかごめのように輪になって、それぞれに姦(かしま)しく少女を嗤(わら)う。一人は彼女を「疫病(やくびょう)神(がみ)」と、一人は彼女を「気味が悪い」と、あるいは、一人は彼女を「無価値」だと。ぎょろりと丸い一つ目で、串刺すように睨(にら)むものだから、少女はただじっと頭を抱えてしゃがみ込むしかない。

それは、少女がよく見る一種の悪夢だった。

「……っ！」

悪夢から飛び起きた少女は、荒い息のまま周囲を見回した。そこには黒い異形も炎もなく、いたって平凡な、いつもの少女の部屋があるのみだった。それを確認すると、彼女の息は段々と落ち着きを取り戻し、代わりに汗で額に張り付いた前髪のうっとうしさが、彼女の眉(まゆ)を顰(ひそ)めさせた。

顔を洗って歯を磨き、寝間着を脱いで着替えをする。そして寝間着を洗面所の洗(せん)濯(たく)籠(かご)に入れようとしたとき、よく知る男性の叫び声が聞こえた。

(ああ、どうせまた何か壊したかなくしたんでしょ)

それは彼女の叔父であり、両親を亡くした彼女にとっては現在の保護者でもある人のものだった。しかし彼は片付けが苦手なタチで、よく物をどこかにやっちゃったり、なくさないように近くに置いておいて踏んでしまったりすることが多い。だから今回もその手の何かが起こったのだろうと思って、少女は特に慌てることもなく、洗面所を後にした。

居間に入ると、少女の兄がトーストにマーガリンを塗っているところだった。狐(きつね)色(いろ)の表面に、金色の幕がかけられていく。少女がそれをまだ眠気の残る顔で見ているところ、彼女に気付いた兄に「おはよう」と声をかけられた。

「リンは食パン何枚焼く？」

リンというのは、少女の名前だ。フルネームで言えば、番(つがい)リン。それがこの、十歳そこそこの少女の名前。

リンが適当な枚数を告げると、リンの兄、千也(せんや)はトースターに食パンを放り込んだ。その間にリンは自分の分の食器を出して、コップに牛乳を注ぐ。テレビではいつも通りの朝の顔が、天気予報を告げている。しばらくすると、叔父の藤(とう)治(じ)がレンズの割れた眼鏡を持ってやって来た。本日の朝の悲鳴の原因はそれだったらしい。

「え、また割ったの？ 叔父さん」

「割ったんじゃない。意図して割ってない。いつの間にか割れていた」

呆れたような声で千也が言うと、藤治は子どもの屁理屈のような返事をした。紺色の作務衣(さむえ)を着た、三十路の大の男が、口を尖(とが)らせて。どうせまたなくさないように枕もとに置いていたのを忘れて、踏んでしまったのだろう。毎回毎回よく気付かないものだ、この鈍(にぶ)さは一周回って感心するところなのかもしれないと、トーストを頬(ほお)張(ば)りながらリンは思った。

それはなんら変わったことのない、つい数か月前に始まった日常の風景であった。

夏休みの直前、リンと千也の両親は事故に遭い、他界した。そして様々な理由から二人は母方の叔父、番藤治に引き取られ、この古い日本家屋にやって来た。彼の養父が亡くなってからは男一人で暮らしていた藤治だったが、あまり家事は得意ではないこともあり、最初は様々な苦労があったがようやく少しずつ生活が落ち着いてきたところだった。

「そういえばさ、リン」

「……何？」

リンが食べ終わった食器を台所に持っていくと、食器を洗う千世に話しかけられた。

「友達、できた？」

「……………」

問われた質問に、リンは沈黙することで答えた。後ろめたいことを聞かれると黙ってしまうのは、彼女の悪い癖だった。

数か月前にこの家に引っ越してきたリンたちは、当然転校することとなった。千也は夏休み明けから近くの中学校へ、リンは精神状態が落ち着くのに時間がかかったため、十月頃から近くの小学校へ。そして転校してから現在に至るまで、確かにリンには友人と呼べるような人物はいなかった。しかし彼女の場合問題なのは場所ではない。両親が健在であった頃も何度か父の転勤にともなって転校をしていたのだから。

そもそもリンは小さい頃からどうにも人を寄せ付けない雰囲気のある子どもだった。もちろん何かしてほしいと頼まればそれに応じるし、最低限のコミュニケーションは取る。しかし兄と一緒に小学校に通っていたときは、大抵は兄にべったりで、休み時間は自分の教室より兄の教室にいることの方が多かった。そして兄が中学生になってからは、その時間の大半を図書室などで過ごすようになった。両親を失ってからその傾向は一層強くなり、自分から人を避けている節もあった。

「……兄さんは、どうなの？」

「僕はまあ、まあまあってところかな」

そう言って千也は食器を片付ける。リンが露骨に話を逸(そ)らしても、千也はそれ以上追求しようとはしなかった。千也は別に、リンが友人を作ろうとしなくともそれを責めようとは思わない。ただ、幼い頃からずっとカルガモの子のように自分の後ろをついてきた妹を心配しているのだ。自分がいなくても、この子はちゃんとやっていけるのだろうか、と。両親を亡くしてから、その想いは以前より強さを増した。

朝食の片付けが終わると、リンは出かける準備をして赤いランドセルを背負った。兄の準備ができるのを待って、途中までは一緒に登校し、橋の前で別れる。

「おーい、番！ 待ってよ！」

橋の四分の一辺りに来たところで、リンを呼ぶ男の子の声を聞き、リンはうっとうしそうにため息をつく。足音は少しずつ近づいてきて、ついにリンに並んだ。

「なあ、待ってって言ったじゃん」

リンは隣でする声に振り向かず、返事もせずに、俯(うつむ)き気味になって歩調を速めた。めげずに声は追いかけてくるが、それにも無言を貫き通す。まるで閉じた貝のように、頑(かたく)なにその存在をシャットアウトしているようだった。

そんなリンにムツとしながらも、すぐに気を取り直して、少年は勝手に一人で世間話を進めていく。少年——榊(さかき)龍二(りょうじ)とリンには、これがいつものやり取りであった。大抵、龍二がリンに無理矢理話しかけ、リンはそれに耳を貸さず、だがそれに負けじと龍二も会話を押し付ける。そんなやり取りが、ここ一ヶ月ほど続いている。特に喧(けん)嘩(か)をしたというわけではなく、最初から今日まで、二人の関係はこんな感じだ。二人の様子を見て「まるで我慢比べだ」と言った者さえいる。正直リンは彼をうっとうしく思っているし、これだけあからさまに会話を拒否しているのに一ヶ月も話しかけてくるなんて、一体どれだけ太い神経をしているのだろうかと思議に思わずにもいられなかった。

そういうわけで不機嫌に、橋の歩道のアスファルトを見ながら早歩きで進むリンの視界に、一瞬、そこにはあるまじき鮮やかな青が迷い込んだ。晴天の下にきらめく南国の海の波を切り取ったような色の蝶が、その羽の優雅さで人を惑わすように飛んでいたのだ。リンは誘われるまま、ついその蝶を視線で追いかけて、その先にあったものに一瞬息を詰らせた。

それは、何の前触れもなく、そこに存在した。水に濡れた黒い髪は蛇のようにならねってこけた頬に張り付き、土色の肌を覆うワンピースは乾き切る前の血のようなくすんだ赤色。橋の手すりとは彼女の首を結ぶロープは、重力を無視して上へと伸び、彼女もまた同じように足を空に向けている。閉じた瞼(まぶた)の向こうの眼窩(がんか)に、一体収まるべきものは入っているのだろうか。彼女だけが古い映画のフィルムから出てきたように、虚(うつ)ろで、色褪(いろあ)せ、傷んでいる。しかし謔(うわ)言(ごと)を呟(つぶや)く唇と、時々痙攣(けいれん)する指先だけは作り物のような鮮やかな紅で、それが一層不気味だった。

リンはごくりと唾(つば)を飲み込むと、その異常が瞼を開ける前に目を逸らした。

それは自身の経験からと、叔父の忠告に従った行動だった。

リンには、生まれつき普通の人間には見えないものが見えた。これが、リンが両親の死後藤治に預けられることとなった理由の一つであり、リンの今の性格が形作られることとなった第一の原因である。あやかし、妖精、神霊、あるいはそれ以外の名状し難いものたち。それらはリンに物心がつく前から、はっきりと彼女の目に映っていた。それこそ、例えば幽霊であればそれが生きた人と見分けがつかないほどに。

そして、リンにそれらのものたちが見えていると知ったリンの母は、彼女に「自分だけに見えているものをあまり他人に話してはいけない」と言い聞かせた。唯一話していいとされたのは、両親と兄だけであった。母は親族にさえリンの異質を告げず、特に母方の親族においては徹底的で、リンが彼らと会うことさえ避けさせた。リンはそんな母を不思議に思いはしたが、素直に従った。母の言いつけを守って、いつも兄の服の裾(すそ)を引っ張ってあれは何か、これは何かと聞いて、見えたものについて決して他人に話そうとしなかった。

しかし、それでもふとした瞬間について「それら」に話しかけてしまうこともあった。彼らには見えない「何か」に対して話しかけたり怯(おび)えたりするリンを見て、周りは決まってあまりいい反応をしなかった。時には嘘つき呼ばわりされることもあった。いつも彼女が見るものに付き合っている兄だけが、ただの妹として接してくれた。だからリンはいつも兄に引っついてまわり、同じクラスの子どもともあまり積極的に関わろうと思わなかった。それでも学校に休まず通ったのは、両親を心配させまいとしてのことだった。

今の学校でも、リンは噂(うわさ)になっていた。彼女には幽霊が見えるのだと。まあ、実際は幽霊どころではないのだが。ともあれ、そんな噂と彼女の話しかけにくい雰囲気から、彼女はクラスの中で浮いていた。休み時間に彼女に冗談を言って笑いあおうとする者はなく、かといっていじめられるわけでもない。日常における最低限のコミュニケーションは取っても、それ以上彼女に踏み込んで来ようとしな。まるで開けてはいけない箱のように。触らぬ神に祟(たた)りなしと言うが、彼女へのそれはまさにそれであった。おそらく、現代の人間が見る必要のないものを見るという異質を、子どもながら無意識のうちに感じ取って避けているのだろうと、藤治は言った。

しかしそんな中にも変わり者はいるようで、それが今、リンの隣で勝手に何やら話題を振っている榊龍二という少年だった。彼はリンと同学年であれど違うクラスの子どもで、友人の多い、明るく活発なムードメーカーであった。そんなリンとは正反対のタイプであるはずの彼は、一ヶ月ほど前、突然リンに話しかけてきた。接点などあまりないはずの彼の行動に当然リンは戸惑ったが、他の人に接するのと同じように、最低限の言葉だけを返して彼を突き放した。しかしそれでもまためげずに話しかけてくるので、リンは首をひねらずにはいられない。

「ん？ いきなり止まったけどどうかしたのか？ そっちって何もないだろ？ ていうか、顔青いし大丈夫か？」

「……別に」

心配そうにリンの顔を覗(のぞ)き込む龍二と、そっぽを向くリン。

「ふーん。あ、そういえばここ、幽霊が出るんだってさ。子どもを亡くして首吊り自殺した女の人が橋の真ん中辺りでいきなり現れるって」

そんなリンの様子をあまり気にせずに、龍二は話を続ける。

「幽霊と言えばさ、番って幽霊が見えるって聞いたけどあれって本当？」

リンの足は、そこで止まった。轟々(ごうごう)と、強い風の音だけがその場に満ちていた。

「……それが本当だとして、それでどうするっていうのよ。それで一体、あなたに何があるっていうの？」

龍二の方を振り向かずに、リンは彼に問うた。龍二はそれを聞くとしばらく考えて、こう答えた。

「うーん……見てみたい、かな」

「……なんですって？」

龍二の言葉に、リンはようやく彼を見た。その言葉は一層に陰を増し、もし言葉に込められた棘(とげ)が見えるなら、その棘で相手を刺せるほどであった。

「番に見えているものがどんなものなのか、それをオレも見てみたい」

リンの言葉の棘に気付いていないのか、そう言って龍二は無邪気に笑った。そんな彼の様子とは裏腹に、リンの脳裏に、大きな一つ目と赤い炎が揺れる。

「いい加減なことを言わないで。「見て」みたい？ 冗談じゃない」

声に軽(けい)蔑(べつ)の色を滲(にじ)ませて、リンはそう吐き捨てた。

「大体いつもいつもこっちが無視してもついてきて！ こっちが聞く気もない話なんかして！ いい加減うっとうしがられてるのが分からないの？ 放っておいてよ！」

柄にもなく大きな声で怒鳴るリンに、さすがの龍二も一瞬たじろいだ。その隙(すき)に、というわけではないが、リンはさらに言葉を重ね畳みかける。

「何も知らないくせに！ 何も見えないくせに！ だからそんなことが言えるのよ！ あんたになんか、私に見えているものなんてただの一つも見えないに決まってる！」

齒軋(はぎし)りでもしそうな勢いで、泥を吐くようにリンは怒鳴った。そこまで叫んで、リンは二、三回大きく息を吐いて整える。その様子を見ていた龍二は、リンの言葉を頭の中で反芻(はんすう)するうちに沸々とこみ上げるものを感じていた。

「何も見えないに決まってる？ なんてそんなこと分かるんだよ！」

キッと、リンの茶色に近い濃褐色の目を睨(にら)んで、今度は龍二が吼(ほ)えた。

「……どうでもいいでしょそんなの。とにかく、今度からもう私に話しかけないで。分かった？」

しかし落ち着きを取り戻したリンが声を荒らげることはなく、再び龍二には目もくれず歩き出そうとした。薄い膜の向こう側にいるようで、まるでこちらに見向きもしない。リンの態度は、龍二にはそんなふうに見えた。だから一層、彼の腸(はらわた)は煮えくりかえったのだろう。

「よし、分かった。これから一週間以内に、絶対に、幽霊でもなんでも番に見えているやつを見てやる！ もし見えなかったらもうオレはお前に話しかけない」

風に飛ばされた空き缶が、カランカランと不規則に音を立てた。

「けど、もし見えたら今度からお前はオレの話を絶対に無視しない！ そういうことでいいな？」

それは完全に、怒りに身を任せた勝負の申し出だった。一瞬言葉に詰まったリンの空白を、タイヤとアスファルトの摩擦音が駆ける。

「ハア？ あなたそれ全然分かってないじゃな……ちょっと！」

リンの言葉を最後まで聞かずに、龍二は学校への道を駆けていく。

「……なんなのよ、あいつ」

ぽつりと呟いた彼女の独り言の後には、雨雲を運ぶ風の音と、耳障りなトラックの走行音だけが残された。

その日の夜、リンは夢を見た。また、同じあの悪夢だった。責め立てる声と、炎と、ガソリンの匂い。夢の中のリンには、頭を抱えてうずくまることしかできない。そしてその悪夢は、彼女の目が覚めてからも彼女にあの日の出来事を思い出させ、苦しめるのだった。



轟々(ごうごう)とタイヤが唸(うな)りをあげて、薄暗いオレンジの中を走り抜けていく。一瞬だけ視界が白く染まり、次には緑の生い茂る山と、曲がりくねった道が見えた。スピードが出すぎないようにと盛られたほんの少しの段差で、ガタンゴトンと車体が揺れる。

「あ、兄さん、今一瞬海が見えたよ！」

緑に覆われた山々の間を指さして、珍しくリンははしゃいでいた。千也もどれどれとリンが指さした先を覗(のぞ)くが、すでに海は山々の間に飲み込まれてしまった後だった。

ああ、残念だったねと千也が笑うと、リンは少しふくれっ面で、再び山々の間を見張ることにした。今度はちゃんと、兄にも海が見せられるようにと。

その日リンと千也とその両親は、父親が夏休み前に休暇をとれたということで、早めの夏休みを水族館に行って楽しもうということになり、水族館へ向けて車を走らせていた。アシカのショーが有名な水族館らしく、この日ばかりはリンも子どもらしく楽しみにしており、心なしか口数も多かった。

同じような光景をずっと見続けていると飽きてきて眠くなるのが子どもというもので、リンも例に漏れずうとうととしかけていた。そしてやっと瞼(まぶた)が降ろされようとした時、窓の外を不自然な黒いものが通った。ただならぬ気配のそれを見て、眠気なんてものはこの子どもからは過ぎ去ってしまった。

一つ、それは黒かった。まるでコールタールのような粘っこい黒が、トラック三台分はあろうかという巨体で、車道の横、崖になっているところを飛んでいた。

二つ、それは巨大なナマズのような体をしていて。その癖、動きは大波のように体を縦に波立たせるもので、ナマズの動きではなかった。それにその側面から生えた無数の足はムカデのようで、体の動きに合わせて上下に揺れて小波(こなみ)を作る。そうしてその巨体を揺らして、まるで水中を泳ぐように空を飛んでいる。もっとよく見ると、その足は一本一本がまるで人間の手足のようで、リンは思わず吐きたくなった。

三つ、その顔には、大きな口と一個の目だけがついていた。片方の目がなくて、元から一つ分しか入るところが作られていないらしかった。口は、つるりとした黒い皮膚が裂けて、黄ばんだ歯が見えることで、それが口らしいということだけが分かった。

「……っ！」

目を逸らせなければならない。あれが、こちらに気が付くよりも前に。リンの本能がそう叫んでいた。しかし、リンは目を逸らせなかった。まるでゴルゴーンに睨まれて睫毛(まつげ)の先まで石になってしまったかのように、瞬(まばた)きすらできなかった。

だって、それは今まで彼女が見てきた中のどんなものよりもおぞましく、醜悪で、常軌を逸していた。大きく裂けた口と黄ばんだ歯、面白くもないはずだろうに釣りあがった口角、歯の向こう側に見える血のように赤い舌。ぎよろりと大きな目は黄緑色で、あちこちに血管らしきものが走っていて、瞼はない。ナマズのように黒々としてぬめりけのある体と、ムカデのように無数に生えた手足は、口がきければ一体何があったらこんなことになるのだろうかと言いたくなるものだった。

全てが石になってしまった中で、呼吸だけがいつもより速かった。しかし、こうなってしまっただけで呼吸すらも止まってしまった方がいい気がした。ぼたりと、自分の掌(てのひら)に何かが落ちて、リンは飛び上がる。碌(ろく)に動かない首をそれでも何とか動かしてみると、それは自分の汗だった。夏だがエアコンの効いた車内で、いつの間にか彼女は大量の汗をかいていた。一方、リンとは別の方向を見ていた千也が、さすがに妹の様子がおかしいことに気付いて、慌ててリンに声をかけようとした時。

《み、た、な?》

さっきまで進行方向を向いていた黄緑色の目が、ぎょろりとリンたちの車の方に向き、その目は確かにリンを捉(とら)えた。瞬間、声が直接彼女の脳内に響いた。声はたった一つのはずなのに、二重にも三重にも聞こえた。老人のような、子どものような、男のような、女のような、あるいは、それら全てが混ざったような、不可思議な声だった。

《ちょうだい! ちょうだい! ちょうだい!》

ぱっくりと口が裂けて、いぼだらけの舌が見えるまで口角が吊り上がる。確かにこの時、あれは嗤(わら)ったのだろうとリンは思った。

「何も持ってない! 私、何も持ってない!」

気付くと、リンは声を振り絞(しぼ)ってそう叫んでいた。歯(は)はがたがたと震え、短い言葉を口にするのがやっとだった。するとナマズのような異形は大きく体を揺らし、甲(かん)高(だか)い笑い声とともに、前方を走るトラックにその巨体を向かわせた。反射的にリンは目をつむる。次の瞬間には、音の嵐と体を貫くような衝撃。閃光。高い声は母のもだったか、それともあの化け物の声だったか。それすらリンには分からなかった。そして帯状(たいじょう)のものが宙に浮きそうになる体を締め付ける感触がした後、リンは意識を失った。

「う、ん……」

熱さと痛みで、リンの意識は呼び戻された。薄(うす)っすらと、陽炎(かげろう)のように存在する意識は、ただ炎だけを捉えた。燃えている。炎が、赤々と燃えている。目覚めたばかりのリンには、熱と、痛みと、そんなことしか理解できなかった。

「お、父さん、お母さん、兄さん……」

焼けそうな喉(のど)で、声を発する。目だけを動かして、バックミラーを見る。小さな鏡にはひびが入っていたが、それでも少しは中の様子が窺(うかが)えた。しかし、それは彼女にとっては、むしろ見ない方がよかったものだろう。

父の額(かぶ)から、血が出ていた。母の髪(かみ)が、燃えていた。二人の顔(かほ)は、固く閉じられていた。さらに視線を動かすと、フロントガラスには沢山のひびが入って、そこにいくつかの血(けつ)痕(こん)が残っていた。全部、真っ赤だった。

もう少し頑張って、リンは痛む首を左へ向ける。後部座席に座っていた兄には、大した怪我はないようだった。しかし、やはり両親と同じように、彼の顔(かほ)も閉じられたままだった。

「お父さん、お、母さん、兄さん……!」

リンは、その言葉を何度も繰り返した。喉(のど)が焼けこげるほどに叫んだ。けれど、返ってくる言葉はない。黒煙(くろえん)と炎の向こうにちらちらと見える何でもない青い空(そら)が、あまりにも遠くて、リンは無性に泣きたかった。

次にリンが目を開くと、そこは病院だった。彼女が先に目を覚ました兄の顔を見て、どれだけ安心したことか。そして、兄に両親のことを聞いたが、千也は首を振るだけで答えてはくれなかった。もしかしたら、彼もまだ両親の安否(やすび)について知らされていないのかもしれない。結局、彼女に両親の死が知らされたのは、彼女が退院する数日前のことだった。事故は、ただの不慮(ふりょ)の事故として片付けられた。

通夜(つうや)と葬式(そうしき)は、父の実家で行われた。リンたちの父は末っ子だったこともあって、実家とは別の場所に住んでいた。しかしリンも千也もまだ幼く、葬儀(そうぎ)の準備(じゅんべい)などをするのに実家の方が都合(ごうご)が良かったし、何より強く、父方の祖母(そぼ)が実家以外で葬儀(そうぎ)をすることを嫌(きら)った。祖父(そふ)の後妻(こうさい)だった祖母(そぼ)は、祖父(そふ)と前妻(ぜんさい)の間の子である伯父(おじ)と伯母(おば)をよく育てた。しかしやはり血(ち)が繋(つな)がっているところがあるのか、唯一(ただひとり)祖父(そふ)と自分(自分)との間にできた子である、リンと千也の父を一等可愛(いちどう)がっていた。だから、祖母(そぼ)は二人(ふたり)のことも他の孫(まご)同様(どうじやう)可愛(可愛)がっているつもりだった。

しかし、リンは優しい祖母(そぼ)の笑顔(えがよ)の中に、ほんの少しの違和感(わごかん)があるのを知っていた。それがどういう種類のものなのか、リンには分からなかった。だが、些(さ)細(さい)な仕草(しこう)や声(こゑ)の調子(ていし)が、兄(あに)に対する時(とき)と自分(自分)に対する時(とき)とはわずかに違う気がしていた。それでもリンはある程度、祖母(そぼ)のことを慕(こ)っていた。多少(たうしやう)の違和感(わごかん)はあれ、祖母(そぼ)は基本的に優しくそうに接(せつ)してくれたからだ。

それが、一体(いつてい)どうしてあんなことになったのか、まだ十年(じゅうねん)ちょっとしか生きていないリンには分からなかった。

葬儀(そうぎ)の際(さい)に、父(ちち)の棺(ひつぎ)に花(はな)を入れるときだった。リンも千也(ちんや)も、これで父母(ふぼ)の顔(かほ)を見られるのは最後(さいご)だと聞(き)かされていた。しかし死(し)に化粧(けわ)をして、生前(せいかん)のような綺麗な顔(かほ)になっても、リンは両親(りやうしん)の顔(かほ)を見ることができなかった。今まで散々(さんさん)幽霊(ゆうれい)やらなんやらを見てきたくせに。いや、だからこそ、目を閉(し)じていたかった。死(し)を直視(ちし)することができなかった。見てしまえば、余計(よけい)なものまで見えてしまいそうで怖(こわ)かった。死人(しにん)に化粧(けわ)をして、それは死人(しにん)だ。生前(せいかん)と同じように見えても、それはもう生者(せいじゃ)ではない。

だからリンは、目を閉じて花を入れようとした。だが軽い音と手のしびれと共に、白菊は床へと落ちていった。リンが驚いて目を開けて見上げると、祖母がいた。無表情だった。いつも微笑(ほほえ)んでくれた祖母はそこにいなかった。また自分はいらぬものを見てしまったのかと、リンは無性に怖くなった。

「お前のせいよ」

ゆっくりと、能面のような顔で祖母が呟いた。意味が分からなくて、リンは首を傾(かし)げた。

「お前のせいで、息子は死んだわ。どうしてくれるの」

そう言うと、祖母はいきなりリンの襟首(えりくび)をひつつかみ、酷くリンを揺さぶった。今度は、般(はん)若(にや)のような酷い顔だった。それでも声だけはやたら平坦で、リンはそれが一層恐ろしかった。

「お前のせいよ、お前のせい。いつかこうなるって思った。お前が殺したのよ、お前が」

祖母は繰り返し、何度も、「お前のせいだ」とリンに言った。あんまり何度も繰り返すものだから、その言葉はすっかり、リンの心に染み込んでしまった。

(お前のせい、お前のせい……)

そのうち祖母は他の大人に抑えられて別の部屋に移され、リンもまた千也と一緒に祖母とは別の部屋に移された。

(私のせい、私のせい……)

移動してからも、祖母の言葉はリンの頭の中から出て行ってくれなかった。何度も、何度も、何度も、頭の中で同じ言葉が再生された。

「で、そんな訳で君は落ち込んでるんだね」

鈴を転がすような、美しい男の子の声がリンの隣で響いた。リンが声の主の方を向くと、その声に似合った、美しい容(よう)貌(ぼう)の男の子が佇(たたず)んでいた。中性的な顔立ちに、バラ色の頬。さらさらと流れる亜麻色のおかっぱ髪に、午後の光が差し込む瞳はキラキラと輝いていた。木漏れ日が人の形をとったなら、きっとこんな姿なのだろうとリンは思った。

リンと同じ年頃のこの少年が、いつからそこにいたのかリンは知らない。連れてこられた部屋の縁側に腰かけて、知らない男の子になぜこれまでの経緯を彼に話したのかも分からない。けれどきっと、そういう気分だったんだろうとリンは思うことにした。「自分だけに見えているものをあまり他人に話してはいけない」という母の言葉が脳裏を過(よぎ)ったが、もうそれを言う母はいない。改めてそう実感すると、リンは今日の前にいる者が誰であるかなど、どうでもよくなってしまった。それだけではない。なんだかもう、何もかもがどうでもよくなっていった。リンは疲れていた。話すことも聞くことも食べることも考えることも思い出すことも疲れていた。

「うんうん。そうだね。ここは辛いことばかりだ」

少年はリンの隣に座ると、静かに彼女の背中を撫(な)でた。

「辛いのは苦しくて、嫌だよね。それがずっと続くのなんて、もっと嫌だよね」

背中を摩(さす)る手はどこまでも優しく、羽のように軽やかで、甘美であった。

「可哀想。本当に君は可哀想」

その声は、心底彼女に同情しているようだった。

「だからね、僕が連れて行ってあげる」

少年は、そう言って縁側から降り、リンの手をとって続けた。飴(あめ)細(さい)工(く)のように繊細な白魚の指が、柔らかく彼女の右手を包んだ。

「あそこに行けば、君はもう永遠に辛くなんてなくなる。君を馬鹿にする人も、怖がる人もいない。とても素晴らしいところだよ」

鈴のような優しい声は、それだけで鈴(すず)蘭(らん)のように美しく愛らしく、リンは聞いているだけで目(め)眩(まい)がしそうだった。

「ね、一緒に行こうよ」

そう言う少年の瞳は、蜂(はち)蜜(みつ)のような黄金色に輝いていた。その美しさ、笑顔の甘さに、いっそ自らの全てを預けてしまいたい、リンは一瞬だがそう思ってしまった。彼女の口が、勝手に「はい」と発音するために形を作る。

「答えるな」

リンの肺から今まさに空気が漏れ出ようとした瞬間に、今度は大人の男性の声がした。その固い声にビクビクしてリンが瞬きをすると、その容姿に似つかわしくない舌打ちを残して少年は消えた。それを見て一瞬、リンは心臓に冷や水を浴びせられたような気持ちになり、ああ、またか、とため息をついた。また、自分は人ならざる者と人間同士のように話していたのか、と。

そして、リンは自分の返答を封じた声の主はどんな人物かと、声がした方を振り向く。すると、そこには黒いスーツを着た男がいた。年齢は三十代ぐらいで、少し童顔気味。胸のポケットから、眼鏡のフレームが顔を覗かせている。そして、瞳の色は茶色に近い濃褐色。午後の光を受けて琥珀(こ)珀(はく)のように輝くその色を見た瞬間、リンはこれまで人に感じたことのない感覚を得た。

(……これは)

指の腹が、チリチリする。鼓動が、少しだけ早くなる。男の一步一步が、スローモーションのように遅く感じる。男の視線に、少しだけ、言いようのない圧迫感と居心地の悪さを感じる。それはまるで、あの黒い化け物を「観た」ときに似ているような、しかし全く違うような感覚だった。男が、形のいい唇を開く。

「ああいうものに答えてはいけない。あれは妖精か天狗の類(たぐ)いのものだ。さっき『はい』とでも答えていたら連れていかれていたぞ。見ていればそれぐらい分かって……いや、そもそも人かどうかも区別ができていないのか。難儀なことだ」

そう言うと、男はさっきまで少年が座っていたところに腰をおろした。男の妙な存在感に気圧(けお)されて、口を半分開いたままにしていたことに気付くと、リンは慌てて口を閉じた。不思議なことにさっき覚えた圧迫感は消え去っており、リンは、そういえば兄はどこに行ったのかと慌てて辺りを見回す。

「お前の兄貴なら台所で今茶と菓子を買っているぞ」

そんなリンの様子を見てか、男は彼女の心中を見通したように言った。双方しばらくの沈黙の後、男は再び口を開いた。

「あの婆(ばあ)さんは……お前のお祖母さんは、分かりやすく言うと、勤がいい。無意識のうちにお前の『目』の際立った異質さに気が付いていたんだらう。だから無意識のうちにお前を避けたい、恐ろしいと思っていたんだらうよ。お前や私のような『目』は今の世においては異質に過ぎる。夜でさえ眠らない町がある時代に、光で照らされない場所などほとんどない時代に、こんなものは必要ない。人間は自分と違うもの、未知のものを恐れる。日本人なんてのは特にその傾向が強い」

そうして、リンにとっては所々よく意味が分からないことを一方的にしゃべり終わると、男は再び沈黙した。「何だこの人は」とリンは心中で呟(つぶや)く。しかし、同時に「必要のないもの、いらぬもの」、男のそんな言葉が、どうしてもチクチクと胸に刺さった。普段なら、こんな人物が近づいてきたらリンはすぐに逃げるだろう。しかし彼女はまだそこに座っていた。それは、リンには彼に聞きたいことができたからだった。

「あの、あなたは……」

おずおずと、少女は男に尋ねようとする。

「私か？ 私はお前の母親の弟。お前にとっては叔父にあたる。まあ、お前と私が最後に会ったのはお前が三歳になる前だから、覚えてはいないだろうが」

「いや、そうじゃなくて」

話の途中で見当違いなことを答える男に、リンは頭を振る。彼が自分の叔父だなどと言っていたが、リンは彼を知らない。だから彼の自己申告が本当か嘘かも分からない。しかし彼女にとってはそれよりももっと大事なことを聞かなければならないので、彼女はとりあえずそれについては保留にしておくことにした。

「……あなたは、人間？」

ついさっきした間違いをもう一度犯すわけにはいかないと、リンは警戒の滲(にじ)む固い声で問うた。それに対し男は大げさなぐらい大きなため息をついた。

「その質問に意味はあるのか？ もし私が人でなかったとして、わざわざ人に化けているのに『人じゃない』なんて言うわけがないだろう。大方よく『観え』すぎて、人であるか、人外の者が区別がつかないんだらう。それでよくこの歳まで何事もなく生きてこれたものだ」

「……仕方ないじゃない、聞くぐらいしか確かめる方法がないんだから」

男の言うことは尤(もつと)もだが、なんだか人を馬鹿にしたような言い方にリンは唇を尖らせる。

「じゃあ、その……もしあなたが人間だとして」

リンの目が、わずかに伏せられる。

「あなたは……あなたには、私と同じものが見えているの？」

そう言って、リンは庭の木に目をやる。そこには、満開の桜の木があった。零(こぼ)れ落ちそうなほどの大輪の桜花が、生暖かい風に揺れている。時折強い風が吹けば吹(ふ)雪(ぶき)のように花卉(はなびら)が舞って、舞い降りた先に薄いピンクの絨毯(じゅうたん)ができる。季節は夏。こんな時期に残っている桜の花なんてあるわけがないのに。だからこそ、きっとあれも自分にしか見えていない花なんだらうと、リンは父の実家に来る度少しだけ残念に思っていた。

先ほど男は、「お前や私のような『目』は」と言った。それに、彼曰(いわ)く「妖精か天(てん)狗(ぐ)の類(たぐ)い」であるという少年のことも、まるで見えているかのような口ぶりだった。だから、ひょっとしたら、ひょっとすると。この男は自分と同じ世界を見ているのではないかと、少女は思ったのだ。今まで十数年生きてきて一度も出会わなかった、いわゆる同類というやつが、この男ではないかと期待した。

「……ああ、確かにあれは、見事なものだ」

リンの視線を追って、男は目を細めた。リンはその眩きに全身が波打つような感覚を覚えて、思わず目を見開いた。そして、男はなおも言葉を続ける。

「……そうだな、見える方見えない方で言えば、私もお前と同じで、人よりもよく『観える』方だよ」

横に座る少女が息を呑(の)む気配を感じながら、「けれど」と男は続ける。

「確かに私はお前とよく似た『目』を持っている。『普通の間人』とやらには『観えない』ものを『観る』目を。まあ、詳しい話をすると、問題なのは『目』ではなくどちらかという『脳』の方になってくるのかもしれないが。だが、たとえ『観える』目を持つ者同士でも、全く同じものが『観えて』いるとは言えない」

「……意味分かんない」

男の話に、一時は気持ちの浮きたったリンも、眉(まゆ)根(ね)を寄せて怪(け)訝(げん)そうに眩く。

「ふむ……例えば、あの桜の花は、咲いてどれぐらい経っている？ あとどれぐらいで散りそうだ」

男は桜の木を指さし、リンに問いかける。

「どれぐらいかって……詳しくは分からないけど、あれだけ花卉が下に落ちてるんだから、あと一週間ぐらいじゃない？」

彼女は、ただ見たままを男に伝えた。

「ほう、花卉、か。花卉、ね。……残念だが、私にはまだ桜は散っていないように『観える』よ」

それを聞いて、リンは大きな声をあげて抗議した。

「ハア!? 嘘でしょ信じられない! だって、あんなにいっぱい……」

少女の目には、確かに薄桃色の絨毯が映っていた。どうやったって見間違うことがないぐらい、はっきりと、花卉たちはそこに在った。

「……分かっただろう。どうやら、お前は花卉が木から離れても『観える』らしいが、私には木で咲いている花しか『観えない』らしい」

そう語る男の声には焦りも緊張もない。いたって冷静に、当たり前のことを当たり前に言っている、というふうだった。リンにはまだその男の言うことが信じられなかったが、男にリンを謀(たばか)る気がないことだけは感じられた。

「私も、お前も、誰一人として同じ世界を見ている人間なんていないんだよ」

風に吹かれて、一枚の花卉がリンの足元に落ちる。リンの親指の爪ほどもない大きさのそれは、今、リンの目にしか映っていない。今まではそんなこと当たり前だったというのに、同じものを見ている人間に会えたのかもしれないと期待した分だけ、今はなんだかそんなことが少し悲しく思えた。

「ねえ、なんで私たちにだけ、これは見えるの」

足元の花卉をつま先でつついて、リンは男に問う。

「そうだな。それは、人間があれらを見るような環境が少なくなったから、と、私たちの世界の見方が少々他人と違うからだよ」

美しく咲く妖桜を見つめて、男は答える。

男曰く、世界というものは何枚も重なった透明な板のようなもの、人間などはそこに描かれた絵のようなもので、それら全てが重なって初めて絵が完成する。すなわち、世界の全容というものが完成するものであるらしい。

しかし、透明な板の上に描かれたものは基本的にそれぞれの板の絵しか見ることができず、例えばそれが人間であれば、人間に適した物理法則が支配する世界しか見えない。だが、それでも時として隣り合う板同士の境目が曖(あい)昧(まい)になるとき、二つの世界にあるものたちが遭遇しあうこともある。それは例えば、誰が誰か曖昧になる逢魔(おうま)が時(とき)であったり、世界を映す真夜中の鏡であったり、どこかとどこかを繋ぐ薄暗いトンネルであったり。認識が曖昧になるとき、人は魔を見る。

しかし、現代においては電灯が道のあちこちに設置され、夜でさえ昼のように明るい街がある。光ある場所では、人はしっかりと自分の世界を歩んでいける。だから、人が魔と出会うことは昔に比べて格段に少なくなった。

では、そんな現代であっても人と異なる者たちを見る者がいるのはなぜか。なぜ、その人間は異形を見るのか。

その答えを言葉にするのは簡単だ。彼らは「見て」いるのではなく「観て」いるのだ。彼らは通常の間人が目にすることのない、透明な板が重なった状態の世界を「観賞」することができる。あたかも、美術館で一枚の絵を観るように。それはある意味、彼らの知覚が優れているということではあるが、裏返せばそれは異質であるとも言える。だって別に、人は人間の在る安全な世界以外を見ることを、義務付けられてなどいない。関われば何があるか分からないものを積極的に「観る」など、全く意味のない機能だ。その証拠に、世に生きるほとんどの人間は、己の生きる板の上の出来事だけを見ている。



例えば今回の事件の犯人が人知を超えた何かであって、それを「観える」人間が訴えたとしても、信じる人間などどれほどいようか。その人知を超えた何かと同じような事件を複数起こしたとしても、世間ではそれらは全く関連性のない「不慮の事故」で終わるのだ。だって彼らにはそれらは「見え」ないのだから。存在確認のほとんどを視覚に頼る人間にとって、「見え」ないものは、「無い」ものとほとんど等しいのだから。「無い」ものを「在る」と言う方が、おかしいのだから。

故に、人は異質な彼らを時に崇(あが)め、時に恐れ、時に敬い、時に軽蔑する。例えば、少女の父方の祖母が彼女を無意識に恐れたように。

「やっぱり、あなたの言っていることって意味が分からない」

まだ小さい眉間にさらに皺を寄せて、怪訝そうにリンは言った。

「まあそりゃあ、ね。私もお前ぐらいの歳ではまだよく理解できなかったさ」

「あなたも私もその、『観賞』？ することができるなら、なんで私に『観えて』いるものがあなたには『観え』ないの？それに、桜の木の方とか、さっきの男の子は『観える』のに、なんで花弁だけ『観え』ないの？」

リンは、男の濃褐色の瞳を覗き込む。午後の光を浴びて鼈甲(べっこう)のような輝きをみせるそれは、庭の桜をじっと見つめている。

「それはお前の方が能力が優れているってことだろうよ。日本人よりもマサイ族の方が視力がいいのとそんなに変わらん。相手の力だったり単純に体の大きさだったり……そういうものはまあある程度までなら大きい方が『観え』やすくなる。目が悪い人間でも大きなものは見えやすいだろう？ まあ、もっと言えば『観え』やすいもの『観え』にくいものにはいろいろと個人差があるし、私たちとは反対に全く『見え』ない人間もいるんだが……そこまで話しているとキリがない」

男の答えに、ふーんと、あまり納得していないような返事をする、リンは縁側の下で足をぶらつかせた。

「あれ、藤治叔父さんだ」

きゅつきゅつ、と古い板が鳴る音にリンたちが振り返ると、そこにはお盆を持った千也がいた。

「兄さん」

思わず身を振(よじ)って、リンは兄に駆け寄ろうとした。リンにとってはこの屋根の下で唯一の家族である兄が戻ってきたことで、自然、少しだけ緊張が解けたように少女の口の端が緩んだ。

「ああ、この人は藤治叔父さん。リンは小さい頃に会っただけらしいから、覚えてないかもね。大丈夫、ちゃんと僕にも見えてるよ」

千也は妹に安心していいとでも言うように、藤治叔父さんとやらの肩をつついて見せた。その姿に、「ああ、なるほど」と男は何か納得したように呟いた。そしておもむろにパン、と手を叩くと、こう言った。

「さて、千也も来たことだ。そろそろこっちも聞きたいことを話してもらわないと」

「聞きたいこと？」

千也が、藤治に茶を渡しながらかねる。

「ああ、お前たちが遭った事故についてだ」

それから、千也とリンは事故について分かる範囲で藤治に説明をした。一瞬本当に自分の見たものについて話しているものだろうかと思(しゆん)巡(じゆん)したリンであったが、それはもう今更のこのように感じたし、何よりあの黒い異形が何だったのかを知りたくて全て話すことにした。

「なるほど、そういうことがあったわけか」

千也が持ってきた湯呑から、藤治は緑茶をすすった。

「で、その黒いナマズ？ って一体何なの？」

そう言った千也は、同じく台所で貰ってきた饅(まん)頭(じゆう)の袋を開けたまま、それを食べるタイミングを失っていた。

「さあ？」

「さあ、って……分からないの？ 叔父さんなんで僕たちに話を聞いたのさ」

呆(あき)れたように、千也はため息をつく。

「そう言われても分からんものは分からん」

お盆から白あんの饅頭をとって袋を剥(む)くと、藤治は一口それを頬張る。ある程度咀嚼(そしやく)してから緑茶を口に含んで飲み込むと、言葉を続けた。

「大方、呪具が人の怨(おん)念(ねん)を吸って巨大化したものか、人の負の念が吹(ふ)き溜(だ)まるところから生まれた何者か、というところだろう。そういうものは生まれつき他者に害をなすようにできているから、その本能に従って、偶然目が合ったリンやその周辺の者を襲った。動機なんてないに等しいし、強いて言うなら気まぐれというやつだろう。災害とそう変わらん。そう考えると正しくこれは事件というより不慮の事故だ。直接対面すればもう少し何か分かるかもしれないが、過ぎたことを蒸し返せばあっちも今度は何をしてくれるか分からん。第一、私は私の姉を殺した相手が知りたいわけじゃなくて、姉が死んだ理由が知りたいだけなんだよ」

言い終わると、藤治は残った饅頭を口に放り込んだ。

「……やっぱり、私のせいなの？ 私が、アイツと目を合わせたから」

一人だけ、貰った菓子の袋も開けないまま、リンが俯き気味に呟いた。ぎゅっと握った手の間で、菓子は今にも潰(つぶ)れそうだった。

あの日、あの時。あれは確かにリンと目を合わせ、リンに語りかけ、そして前方のトラックを襲った。トラックの運転手も重傷を負って、今も入院しているらしい。ニュースでは強風に煽(あお)られたことが原因だの、トラックの運転手の居眠り運転が原因だの、事故の原因について様々な憶測が飛び交って、結局車両の故障で一連の報道は幕を閉じた。しかし、本当の理由はどう考えてもあれが襲ってきたことだ。あの時あれと目を合わせてさえいなければ……リンは今日までずっと、そう考えずにはいられなかった。

「……まあ、それも直接的な原因の一つだろう。けどな、私は無知な子どもを責めるほど大人げないし、この事故は誰か一人の責任で片付けられる話でもない」

さっきまでの生意気さを失ったリンに対して、宥(なだ)めるように藤治は言った。

「少なくとも、私の姉が死んだのは、間接的に言えば姉の自業自得のようなものだよ。だって、お前にああいう者との付き合い方を教えさせようとしなかったんだから」

そう言うと、藤治はゆっくりと「番」という家系のことについてを説明しだした。

彼曰く、元々リンの母方の家系、「番」という家は昔から、リンや藤治のような「観える」人間が生まれやすい家系だった。一時期はそれを利用して財を築くほどであった。だが今回のリンたちの事故のように、「観える」というのはいい事ばかりではない。それは時として凶事を招く。

そもそも「観る」という行為には危険が伴う。「目を合わせる」ということは、こちらが相手を認識することのみではなく、相手にもこちらの存在を認識させることである。つまり人ならざる者と目を合わせるということは、相手にこちらを認識させ、相手に干渉する隙を与えることになる。

実際、番の家の「観える」人間には代々、大なり小なり事件が付きものであった。だがそれを知っていながら、番の家は富を求め「観える」ことを利用した。しかしそれも長くは続かず、あるとき一人の「観える」人間が、それまで栄えた番の家が潰れる寸前に追いやられるほどの凶事を招いた。そしてそれ以来番の家では「観える」ことは避けるべきことされた。しかし、「観える」人間が生まれることは途切れず、度々凶事を起こした。

だから番の家の人間は、いっそ「観える」人間をだけを一か所に集めることで、他の人間が凶事から逃れられるようにした。そしていつからか、集まった「観える」者たちは年嵩(としかさ)の者から若い者へと、人ならざる者たちとの付き合い方、対処法を教授するようになった。

藤治もまた幼い頃に「観える」人間だと分かったら、実の両親と姉から離れて、同じく「観える」人間である養父のところに養子として身を置くこととなった。

「ねえ、待って」

そう、藤治の話を書いたのは千也だった。

「その、リンもその『見える人間』なんだよね？ で、母さんは藤治叔父さんのこととか、番の家のこととか、全部知ってたんだよね？ だったら、なんでリンを養子に出さなかったの？」

「知っていたからこそ、出したくなかったんだろうよ。姉さんはそういう人だった。リンがちゃんとものをしゃべるようになってからは、特に番の家の者をリンに会わせることを避けていたと聞いている」

確かに、リンが四歳になるかならないかの頃から、彼女たちの母親はあまり自分の親族に彼女を会わせないようになっていった。藤治のところにも直接やってくるのが少なくなった。それを藤治はてっきり、姉も家庭を持ってこちらの方が忙しいからか、番の家のことに嫌気がさしてきたかだろうと思っていた。しかし、真実は違ったのだらう。

藤治の姉、つまりリンたちの母親と藤治は歳の離れた姉弟で、姉は藤治をととても可愛がっていた。だから幼い藤治が養子に行くことをとても悲しんだし、まだ親が恋しい年頃なのに家族から離れなければならない彼を大そう哀(あ)われんだ。彼を気遣って、年に何回もこっそり彼のもとを訪ねたし、よく連絡も取っていた。

だから、最愛の娘が「観える」人間であると分かった時、彼女がどれほどのショックを受けたか、藤治は想像に難くない。千也とリンの兄妹の仲が良かったのも、自分と弟のことを重ねて見る要因になったのだろう。

だからおそらく、リンを家族から離させないために、彼女はリンのことを親族に隠し通すことにした。

「結局、姉さんは私が養子に引き取られた意味は知っていても、私の目が引き寄せられるかもしれないものの危険性に対して、理解や実感はしていなかったんだろう。それか、理解していても、リンを手放したくなかったのか……」

最近古い一族のしきたりについて首を傾げる者も少なくはないと、藤治は聞いている。藤治は、親族がいい顔をしていないのを知っていても藤治に会いに来ていた姉を思い出す。リンと同じ栗色の髪が美しい人だった。元々、藤治が養子に出されたことにもあまり納得していなかった姉のことだ、理由がどちらであっても不思議ではない。そう思う藤治は姉に、「全く馬鹿なことをしたもんだ」と悪態をつきたくなった。だが、もういない相手にそんなことをしても意味がない。だから代わりに革靴で小石を一つ、ぼーん、と蹴るだけにした。

一方リンは、藤治の話聞いても、やはり母が死んだのは自分の「目」のせいのように思えてならなかった。

(だって、そもそも私があんなものを『観え』なければ)

「観え」なければ、母は親族にリンのことを隠さずに済んだ。事故が起こることなどなかった。藤治は母が事故に遭ったのは自業自得だと言ったが、それでも全てのことの発端はリンが「観える」ことにある。

「お前のせいだ」

祖母の声が、未だにリンの耳にはこびりついて離れない。

「それでさ、これから僕たち、どうなるの？」

千也が不安そうに呟いた。無理もないことだった。すでに両親は亡く、父方の祖母がああではあちらに身を置くのも不安だ。

「それについてはな、二人には私のところに来てもらおうかと思っている」

「二人？」

千也は、自分を指さして驚きの声をあげた。てっきり、話の流れからリンだけが連れていかれるのではないかと思っていたからだ。

「ああ、お前は長い間、リンが何を『観て』きたか知っているだろう？」

千也は、その言葉に頷く。生まれつき「観える」目を持って生まれたリンには、普通の人間に見えないものというもの分からない。だから母に「自分だけに見えているものを決して他人に話してはいけない」と言われた時から、リンはいつも千也にあれば見えるか、これは見えるかと聞いて、何が他者に見えないものなのかを判断していた。

「たまに、『観える』人間の感覚に引っ張られて『観える』ようになってしまう人間もいる。お前はリンの『観て』いるものに長い間触れすぎた。いつ『観える』ようになってもおかしくない。だからいっそ二人ともうちで預かってしまった方が、後々面倒がないだろう」

それに、と藤治は最後にこう付け足す。

「ここまでして姉さんがお前たちを離れ離れにすまいとしてきたのに、それを私が台無しにしてしまったら、姉さんに崇られかねん」

そう言って、藤治は少しおどけたように肩を竦(すく)めて見せた。



龍二と一方的な約束をされてから、木曜日、金曜日と過ぎた。その間、龍二はリンのもとに現れなかった。リンもそれを特にどうとも思うこともなく、日々を過ごした。ただ、眠ると必ずあの悪夢を見た。黒い一つ目の異形が、老婆の声で彼女を責め立てた。リンは両親を亡くしてからよくあの悪夢を見るようになったが、こうも連続して見るのは珍しかった。だから、何か悪いことでも起きるのかと、それだけが少し気がかりだった。

果たして、彼女の気がかりは土曜日に本当のものとなってしまった。

それは、夕方にリンがお使いから戻った時のことだった。家に帰るとリンは母屋に藤治の姿が見えないことを確認して、勝手口から庭に出た。藤治の家——すなわち、代々番の家の「観える」人間たちが住んできた家は広くて古い。母屋にはいくつか使っていない部屋があるし、三人で暮らすには逆に不便を感じることもある。もっと昔はもう少しここに住む人も多かったらしいが、時代とともに番の家でも「観える」人間は少なくなっていき、今はリンと藤治だけだ。そして、家が広ければ庭も広い。町中のちょっとした公園ぐらいの広さはある。それも子どもが鬼ごっこができそうな程の。橋を渡った先には新興の住宅地もあるし大きなショッピングモールもあるが、この家があるのは町外れ。数百年前には宿場町として栄えたらしいが今はその面影を所々に残すのみの田舎町で、地価は安いらしい。

だから他の家でも古くからここに住む家ならそこそこ広い庭があるが、それでもこの家は別格だった。もっとも、手入れはそれほど行き届いていないので宝の持ち腐れではあるが。

少し前に除草剤を撒(ま)いて大分すっきりした庭を駆けて、リンは離れの勝手口を開いた。この離れはこの家の敷地の中でも母屋とは反対側に作られており、離れといえども人が住んで商いができるぐらいの大きさである。勝手口とは別に、道路に面した表にはちゃんと玄関があり、そこには「琥珀堂」と書かれた看板が下がっている。

「琥珀堂」は、対内的には、代々番の家の「観える」人間がその目の扱い方、人ならざる者たちとの付き合い方を学ぶ場として存在している。対外的には、店に来た人ならざる者の要望を聞き、見合った品を見繕ったり、人ならざる者と人との間にあるトラブルへの対処をしたりもしている。そしてその店内は一見すると古道具屋か骨董品店かというように、所狭しと様々な物が置かれている。いや実際最初はそういう店であつたらしいし、かつての主人は目利きとして働くことのできる目の扱い方を高めていったらしい。しかし、いつの頃からかその他の依頼も徐々に受けるようになり、今はほとんどその手の事に関する何でも屋のようになっている。

そして、その琥珀堂の今の店主は藤治である。今日も様々な物たちに囲まれながら、客がやってくることの方が少ない店内で、本職である文字書きの仕事をしている。そして手が離せないから、今筆が乗っているからと言ってリンをお使いに出させた。

そのお使いが終わったことを報告するために、リンは店内へと続く扉から顔を出そうとした。すると、ここ数日聞いてなかった声が聞こえてきた。龍二だ。リンはそれを確信するとすかさず扉を開けるのをやめて、少しだけ開いた扉の間から店内の様子を窺(うかが)った。

龍二は、ガタイのいい男性と来ていた。リンはこの男には見覚えがあつた。男は近所の神社で神主をしている者で、藤治の昔(むかし)馴染(なじ)みだつた。以前からよく藤治のもとを訪れているのを見かけたことがあつたし、リンが藤治の店番をしている時に藤治を訪ねてくることもあつた。明朗快活で、人懐っこい性格の男だつた。確か、龍二の父親でもあるはずだ。リンは一度だけこの二人と一緒にいるところに居合わせたことがある。後から、ああ、この父親あつてのこの息子かと思つたものだつた。そしてその男が、いつもの笑顔をどこかに置いてきてしまったかのように、神妙な面持ちで藤治と話している。

一方その隣に立っている龍二はというと、こちらもどこか不安そうで、いつもの快活さは半減しているようだつた。そして、怪我でもしたのかその右目には白い眼帯が着けられていた。

(……ん?)

その眼帯を見て、リンは首を傾げた。正確に言えば、その眼帯から垂れている糸を「観て」おかしく思つた。長いのだ、異様に。眼帯から垂れた糸は地面にまで延び、よく見れば店の入り口まで続いていそうだつた。眼帯のガーゼがぼつて垂れているとしたら、あまりにも不自然だ。

(何、あれ)

一度目をこすってリンはもう一度その糸をよく「観よう」としたが、目を閉じて開けるまでの一瞬で、その糸は消えてしまった。瞬きを繰り返してみても、最初からそんなものはなかつたかのように消えたままだ。しかし、先ほどリンははっきりと眼帯から伸びる白い糸を目撃していた。彼女の見間違いでも、記憶違いでもない。

——これから一週間以内に、絶対に、幽霊でもなんでも番に見えているやつを見てやる!

数日前の龍二の、その言葉が彼女の耳に蘇(よみがえ)る。まさか、と、リンは思わず口に手を当てる。脳裏で、チリチリと火が燃え始める。

龍二とその父との話を終えたらしい藤治は何やら龍二の父だけを呼び、リンのいる扉を開けて、二人で店の奥へと入つていった。途中、扉のそばでリンとすれ違った藤治は、彼女の顔を見るなり呆れた顔で小さく顎(あご)をしゃくつた。指示した方向は、店の中。店内に一人残された龍二のいる方だつた。「何があつたのか自分で聞いてこい」ということらしい。

藤治に無言で促されて、リンはそろそろ扉から顔を出し店内に入る。店内に設けられた小上(こあ)がりに腰かけていた龍二は、彼女が近づいてくるのに気付くと、手持ち無沙汰にぶらつかせていた足を止めた。

「あれ、番」

そう言って軽く手を挙げる龍二は、いつもと変わらないように見えた。けれどそれは、リンの前で弱っているところを見せたくないという意地がそうさせているのだろうと、先ほどの俯(うつむ)き気味の彼の顔を見ていたリンは思つた。

「ねえ、あんた、何かしたの?」

開口一番、目を吊り上げたリンから発せられた言葉に、龍二は一瞬顔を引きつらせた。

「何かってなんだよ。何もしてないって」

そう言って、龍二はぎこちなく笑う。

「じゃあなんでここにいるのよ。このこと、何も知らないでいるわけじゃないんでしょ? その右目、何かしたんでしょ?」

興奮して早口でそんなことを捲(まく)し立て、鬼(き)気(き)迫る怖い顔でにじり寄るリンに、龍二は両手を挙げて降参のポーズをとった。

「待ってって落ち着けよ！ 何があったかちゃんと話すから！ けど、オレここのこと全然知らないし、『右目を治すためだ』って言われて父さんに連れてこられただけだし……なあ、こことって一体何なんだ？ 右目を治すって、何するんだ？ あ、関係ないなんて言って誤魔化しても無駄だからな？ お前が話さないなら、オレも何があったか話してやらないし」

そう言われてリンはムツとしながら、龍二にこの店のことについて話すべきかを考えた。普段の彼女なら関係ないと突っぱねるところだが、一応客としてきているらしい彼にここのことを何も知らせない道理はないし、言わないと本当に口を割りそうにない。少し迷ってから、リンは口を開いた。

「……あなたが信じるかどうかは知らないけど、ここは妖怪とか、神様とか、妖精とか……そういう、人間とは違う者と人間との仲を取り持つ店だって聞いている。元々は鑑定とか目利き？ とかをやっていたそうなんだけど、今はほとんど何でも屋みたいなもの」

龍二の隣に腰かけて、リンはさらに続ける。

「番の家の人たちには、昔からそういうのが『観える』人が多くって、その人たちがうまく社会の中で生きていけるように、そういうものたちとどう関わっていけばいいのかを学ぶ場所でもあるって、叔父さんは言った。番の家では『観える』ことは悪いことだってされてるけど、『観える』以上はちゃんと対策を知っておかないと、余計悪いことになるって」

それは例えば、あの日の事故のように。そう考えてしまい、リンは少し目を伏せる。

「だからあなたが連れてこられたのも、そういう者たちと何かしらのトラブルがあったって、あなたのお父さんが感じたからなんだと思う。ただ、どうやって治療するかは私にも分からない」

「知らないの？」

「仕方ないでしょ、私まだここに来てから三ヶ月も経ってないんだから」

そう、ため息をつきながらリンは言った。

「……やっぱり、番もそういう、幽霊とかお化けとか見えるからここに来たの？」

龍二が、リンの顔を覗き込む。

「……まあ、そんなところよ」

リンはそっぽを向いてそう答えた。

「じゃ、やっぱりオレの聞いたこと、本当だったんだ」

そう言うと、龍二はニヤニヤと笑った。

「うるさい。で、あんたは何したのよ、それ」

ぶっきらぼうにリンが言うと、龍二は自分に起こったことを話し始めた。

「オレさ、水曜に番と言い合いして意地になって、絶対に幽霊を見てやるって思ってさ、幽霊を見る方法について調べたんだ」

龍二曰く、最初は図書室の本を調べようとしたらしい。しかし「幽霊を見る方法」が書かれた本などはなく、仕方がないのでとりあえずそれらしいものを片っ端から試してみることにしたらしい。そこでまず最初に彼が試したのは、学校で噂になっているあるおまじないだった。どうせ効果があるかないか分からないのなら、身近で口コミがあるものから試してみた方がいいと思ったからだ。

龍二が普段から仲良くしているクラスの女子から聞いたところ、そのおまじないは「妖精さん」と言われているらしい。なんでも、そのおまじないをすると妖精が現れてなんでも一つ願いを叶(かな)えてくれるというもので、実際にそれをやって「○○君と両想いになりたい」と願ったら次の日にその男子に告白された子がいるらしい。龍二がその「妖精さん」のやり方を同じ女子に聞いたところ、その子は親切に紙に書いて龍二に渡してくれた。

「妖精さん」をするのに必要な道具は、ぬいぐるみと白い紙の人形、ペン、川や井戸の水、鏡が二枚(両面鏡はダメ)、水に浮く皿状のもの、鋏(はさみ)、縫い針、赤い糸。

「妖精さん」の手順としては、一、紙の人形に妖精の名前(どんなものでもいい)と願い事を書く。二、洗面器などに川や井戸から汲(く)んできた水を入れ、そこに紙の人形を入れた皿を浮かべる。そして洗面器を二枚の鏡で挟む。この時、鏡は合わせ鏡にならないように二枚とも裏面にしておく。三、紙の人形に向かって「妖精さん、○○さんおいでください」と八回唱える。(○○の部分には妖精の名前が入る)四、ぬいぐるみの腹を鋏(はさみ)で切って、その中に紙の人形を入れて、切ったところは赤い糸で縫(ぬ)い合わせておく。五、満月か新月の夜に糸を切った中から紙を取り出す。以上が、「妖精さん」のやり方だ。

龍二はさっそく必要なものを集めて、木曜の夜にぬいぐるみに紙の人形を詰め込んだ。妖精の名前はなかなか思いつかなかったので、自分の名前から一部とって「りょう」と名付けた。そして、その日はまだ新月ではなかった。ぬいぐるみはお菓子の空き箱に入れて自分の部屋のベッドの下にしまっておいた。おまじないの説明によると妖精はぬいぐるみの体を借りて願い事を叶えてくれるとのことだったので、一応こっそり父親からカメラを拝借して、カメラを回したままぬいぐるみと同じ箱に入れた。

変化は、次の日の朝にあった。龍二が目を開けると、なんだかいつもより視界が狭い気がした。いつもより距離感がつかみにくくてあちこちに体をぶつけそうになったり、視界の右半分が見えにくい気がした。父や母にそのことを話しているうち、右目が全く見えないようになっていたことが分かった。母も父も心配して、金曜は学校を休んで眼科に行ったが、原因は分からなかった。家に帰って、もしやと思って龍二がぬいぐるみが入っている箱を開けると、そこにはぬいぐるみの目に使われていたボタンが一つとビデオカメラが置いてあるのみで、ぬいぐるみ本体が見当たらなかった。映像を再生してみても途中から画面が暗くなり画像が見えず、ただ音声のみが菓子箱の蓋(ふた)が開く音を捉(とら)えていたのみであった。

「で、そのカメラの映像見てるのが父さんに見つかって、今日ここに連れてこられたってわけ」

以上が、龍二からの状況説明だった。それを聞いてリンは、龍二の眼帯を指さしてこう言った。

「それ、下、見せて」

「なんだよ、特に何も無いぜ？」

「いいから」

リンの只(ただ)ならぬ雰囲気と強い語気に押されて、渋々、龍二は眼帯を外した。瞬間、リンは顔を青くした。

そこには、「何もなかった」。眼球も、瞼もなく、ただ黒い穴のようなものがあった。それは底が見えない、黒々とした、ただ、虚ろな暗闇。ぽっかりと空いたそこが、一体龍二にはどう見えているのか、リンには想像がつかない。

(——なんて)

なんて、愚かなのだらうと、リンはそう思わずにはいられなかった。そしてそう思った瞬間、リンは龍二の頬を叩きそうになるのをぐっと堪(こら)えて、拳(こぶし)かけた手を下ろした。愚かなのは彼だけではないのだと、分かっているからだ。振るわれなかった手は腰の辺りで痛いほど握りしめられ、やがて力が抜けてほどける。

「もういい。……それ、本当に見えない以外に何も無いの？ 痛みも？」

痛々しそうに、リンの顔は歪(ゆが)んでいる。

「ないよ。なんだよ、そっちこそ大丈夫って感じじゃないけど……やっぱり、この目、何か見えるのか？」

特に異常がないと聞くと、リンは逆にそれが一層不気味に感じた。そして強くそう感じるほどに、彼女は祖母の言葉を思い出すのだ。

「お前のせいだ」

(ああ、また。私のせいだ)

祖母の責め立てる声が、記憶の中から彼女を襲ってくる。轟(ごう)々(ごう)と火が上がる音が聞こえる。リンは頭を振って、「いや、何もない。じゃ、私行くから」と答えると、店の裏に続く扉に向かって早足に歩き出した。その声は熱を失ったかのように、淡々としていた。龍二が何か呼び止めている気がしたが、とにかくそこから立ち去りたくて、リンはそれを無視した。



母屋にある自室に籠(こも)って、部屋の隅で縮こまっても、リンを責める声は一向に止まない。これは幻聴のようなもので、実際にここに祖母はいないのだと分かっているにも、呪いのようなその言葉はリンの心を締め付ける。

(私のせいだ)

また、自分の「目」のせいで、災いを被(こうむ)る人が出てしまった。こうなることが嫌だったから、わざわざ人を避けてきたのに。あんなことを言わなければよかった。もっと上手に彼のことを避けられていたら、こんなことにはならなかったんじゃないか。きっとそのうち彼も私を責めるんだろう。そんなふうに、自責の念とトラウマがキリキリとリンの首を絞めていく気がした。

同時に、龍二に対する呆れも彼女は感じていた。なんて馬鹿なんだろうと。噂で出回るおまじないなんて大抵が作りもので、効果なんてあってないようなものなのに。ただ彼女と同じものを「見る」ためにそれを実行して、あんなことになってしまわなくて。どうせ、私の「観る」世界なんて、彼に見えるはずがないのに。だって、「観える」人間である叔父でさえ、同じものを「観る」ことはできなかったのだから。こんなもの「観え」たって、いい事なんて数えるほどもないのに。馬鹿だ、本当に馬鹿だと、自責する心とは別の場所で、リンは彼に心底呆れていた。

「リン、帰ってんだ」

シンとした部屋に、変声期特有の少しかすれた声が響いた。藤治に与えられた部屋の隅、桐(きり)の箆(たんす)の前で、三角座りでうずくまる妹を見て、千也は静かに近づく。

「何かあった？」

リンの前でしゃがんで、千也は優しい声で彼女に尋ねる。昔から、この兄妹はこうだった。その「目」のせいか、それとも生来の性格ゆえかふさぎ込むことの多いリンと、そんな彼女を見かけると決まって傍(そば)によってきて世

話を焼く干也。干也は、リンが何を「観て」も受け入れてくれた。だからリンは兄によく懐(なつ)いたし、干也も自分の後をいつもついてくる妹を庇(ひ)護(ご)する対象として可愛(こ)がってきた。だからリンは兄にはどうしても強く出られないし、話す気がなかったこともいつの間にか話してしまう。

「店の方にリンと同じぐらいの歳の男の子がいたみたいだけど、その子と今リンがそうやってしてるのは関係あるの？ もしかしていじめられた？」

「違う！」

腕の中に顔を埋(うず)めて、そのまま黙って首を横に振るリンに、干也は問いかける。その問いかけにリンは慌(わ)て顔を上げ、兄の言葉を否定した。それからリンは、おずおずと今までのことを兄に話し始める。

「ほんと、馬鹿(ばか)みたい。なんでそんなにあんなものが『見たい』のよ。あんな化け物(まじな)なんて、『観た』っていい事(こと)なんてないのに」

ぼそぼそと、龍二(りゅうじ)と対する時とは対照的に威(い)勢(せい)などなく、リンは兄にぼやく。

「本当に、それだけ？」

干也は真(ま)っすぐにリンの目を見据(し)える。その目をリンは、鏡(かがみ)のようだと思う。いつだって、彼女(かのじょ)を映(うつ)して、彼女(かのじょ)と他者(た)の違(ちが)いを教えてくれる鏡(かがみ)。彼女(かのじょ)が他者(た)と生きていけるように、精(せい)一杯(いっぱい)、透明(とうめい)な一枚(まい)の板(いた)に描(えが)かれたものを、人の世界(せかい)を、彼女(かのじょ)に映(うつ)してくれるもの。時(とき)として、こじれて傷(や)ついでいっぱいのリンの胸(むね)の中から、それでも光(ひかり)るものを探(たづ)ね出してしてくれるもの。そんな兄(あに)の瞳(ひとみ)に映(うつ)る自分に、彼女は問(と)う。本当に自分(自分)にとって彼はう(う)とうしく愚(おろ)かしいだけの存在(そんざい)なのか、それ以外(いそ)に何も思(おも)わなかったのかと。

「……嬉(うれ)しかったんだと、思う。ちょっとだけ」

するりと、言葉(ことば)がリンの口(くち)から滑(な)り落ちた。それはリン自身が一番(いちばん)意外(いがい)に思(おも)う言葉(ことば)で、そんな言葉(ことば)が自分の口(くち)から零(こぼ)れたのが信じ難(信じがた)く、けれどそれは彼女(かのじょ)の胸(むね)にすとんと落ちた。

リンは、素直(すなお)じゃない子どもだ。同じ年頃(と)の子(こ)よりずっと分(わ)かりにくくて、気難(きず)しくて、卑屈(ひくつ)だ。けれど、その幼(こ)い人間性(にんげんせい)は、基本的(きほんてき)に善(よ)いである。目の前(まへ)の誰(たれ)かが傷(や)つけばその痛(いた)みに共感(きんかん)するし、それが自分(自分)のせいなら心(こころ)を痛(いた)めるし、自分に好意(こうい)的に接(あ)してくれる相手(あいて)がいれば、それを嬉(うれ)しいと思(おも)う。

リンが事件(じけん)の後(のち)、以前(いぜん)より一層(いっしやう)人を避(よ)けるようになったのは、もう自分のせい(せい)で他人(たにん)を事故(じこ)に巻(ま)き込みたくないからだ。もう自分が人(ひと)ならざる者(もの)と目(め)を合(あ)わせたせい(せい)で誰(たれ)かが傷(や)つのも、「お前(おまえ)のせい(せい)だ」と罵(のの)しられるのも嫌(きら)しかったからだ。自分のせい(せい)で誰(たれ)かが傷(や)つくことがあるのなら、そうなる前(まへ)に自分(自分)から離(はな)れてほしいと、彼女は思(おも)っている。人(ひと)並(な)み外(ほか)れた「目(め)」に不釣(ふてう)り合(あ)いなほど、人(ひと)並(な)みに、彼女(かのじょ)は他人(たにん)が傷(や)つくことが恐(おそ)ろしい。

けれど、やっぱり自分(自分)の心(こころ)の内(うち)を表現(ひょうげん)するには彼女(かのじょ)はあまりにも不器用(ふきよう)で、時(とき)として自分(自分)が本当(ほんとう)はどう思(おも)っているのかさ(さ)え分(わ)からなくなることがある。龍二(りゅうじ)のこと(こと)だって、う(う)とうしいと思(おも)っていたのは確(た)かに本(ほん)当(とう)だ。けれど、同時に心(こころ)のど(ど)こかで、何(なに)度はね(ね)つけても自分(自分)に関(か)わろうと(と)してくれることを、ほん(ほん)の少(すこ)しだけでも嬉(うれ)しく思(おも)っていたのだ。彼(かれ)がお(お)よそ人(ひと)間の理(り)解(かい)の及(およ)ばないもの(もの)を「観(かん)る」自分(自分)にそれ(それ)でも関(か)わり続(つ)けてくれたことを、彼女(かのじょ)自身(みづか)気(け)付(づ)かないうちに、嬉(うれ)しいと思(おも)うようになっていた。だから、完全(かんぜん)に無視(むし)を決(け)め込(こ)むのは難(た)しくて、結局(けつぎ)いつも最(さい)終(しゆう)的には声(こゑ)を返(かえ)してしま(しま)った。

そんな彼(かれ)が自分(自分)との馬鹿(ばか)馬鹿(ばか)しい言(こと)い争(まじ)いが元(もと)で右目(みぎめ)が見(み)えなくな(な)って、リンは彼(かれ)の短絡(たんらく)さに呆(あ)れ、同時(どうじ)に己(おのれ)の言(こと)動(どう)を恥(は)じた。本当に、なんて馬鹿(ばか)馬鹿(ばか)しいこと(こと)だろうかと。こんなこと(こと)になら(な)ないように、彼(かれ)を突(つ)き放(はな)してきたの(の)と。

絡(絡)み合(あ)った心(こころ)の糸(いと)がほ(ほ)どけてきちん(ちん)と列(れい)をな(な)し、その全(ぜん)容(よう)を理(り)解(かい)したとき、リンの目(め)には一(い)つ(つ)の決(け)意(い)が映(うつ)っていた。

「……確(た)かに、龍二(りゅうじ)がや(や)ったこと(こと)は馬鹿(ばか)馬鹿(ばか)しいと思(おも)うし、あ(あ)いつ(いつ)がそ(そ)んなに『見(み)たい』って思(おも)うのも理(り)解(かい)でき(き)ない。けど、やっぱりあ(あ)いつ(いつ)があ(あ)んなこと(こと)を(を)した(した)のは私(わたし)が原因(げんいん)。だから、私(わたし)はき(き)つと何(なに)か(か)をし(し)な(な)きゃい(い)けないんだと思(おも)う」

そ(そ)こまで言(こと)って、リンは再(また)び俯(うつ)いた。

「……けど、私(わたし)、何(なに)がで(で)きるの(の)か分(わ)か(か)ら(ら)ない。き(き)つと、何(なに)もで(で)き(き)ない」

だ(だ)って、自分(自分)にで(で)きるの(の)は「観(かん)る」こと(こと)だけ(だけ)だと、リンは表(あ)情(じやう)を曇(くも)らせる。そ(そ)もそ(も)も彼女(かのじょ)に「観(かん)る」こと(こと)以外(いそ)がで(で)きたら(ら)、こん(こん)なふう(ふう)に人(ひと)を避(よ)ける必要(ひつや)もな(な)かつた(た)かもし(し)れないし、も(も)しか(か)したら両親(りやうしん)を失(う)わ(わ)ずに済(す)んだ(んだ)かもし(し)れないと。

リンは、強(つよ)く唇(くち)を嚙(か)んだ。血(ち)が出(で)そう(そう)なほど(ほど)に。自分(自分)の無(む)力(りき)さが悔(く)しかった。自分(自分)の無(む)知(ち)さが腹(はら)立た(た)しか(か)つた。彼女(かのじょ)が膝(ひざ)に回(ま)した手(て)を握(にぎ)りしめ(しめ)たとき、自室(じしつ)の扉(かど)が開(あ)く音(ね)がした。

「何(なに)もで(で)き(き)ない？ 馬鹿(ばか)を言(こと)うな。何(なに)のた(た)め(め)にお前(おまえ)はこ(こ)こに(に)いて、何(なに)のた(た)め(め)にお前(おまえ)の『目(め)』は(は)そ(そ)こに(に)ある」

二人(ふたり)が扉(かど)の方(かた)を振(ふ)り向(む)くと、そ(そ)こには腕(うで)を組(く)んだ藤治(とうじ)がいた。

「リン、お前(おまえ)、さ(さ)っき龍二(りゅうじ)に会(あ)った時(とき)何(なに)か『観(かん)た』だ(だ)ろう」

リンは近(ちか)づいてくる藤治(とうじ)に頷(うなず)くと、藤治(とうじ)の右目(みぎめ)に開(あ)いた穴(あな)の事(こと)、そ(そ)して一瞬(いつしゆん)だけ「観(かん)えた」糸(いと)の事(こと)を話(は)した。

「なるほど、糸(いと)か……」

藤治はリンの話の聞くと顎に手を当て何かしばらく考えているようだった。

「うん、丁度いい」

そして考えがまとまったのか一人で顔くと、リンを見てこう言った。

「リン、龍二の目はお前が治せ。方法は教えてやる」



「リンお前が『観た』糸はな、縁だ」

「縁？」

再び琥珀堂に戻ってきたリンと藤治は、小上がりに座って話を始めた。榊親子には今日はいったん帰ってもらったらしく、二人の姿は見えなかった。藤治は小上がりに置いてある机の引き出しから糸と鉋を取り出し、机の上にあつちり紙と合わせて二つのでてる坊主を作った。そして一本の糸の端と端をそれぞれのでてる坊主に結(ゆ)わえると、説明を始めた。

「そう、人と人とを繋(つな)ぐモノ、人と物とを繋ぐモノ、人とそうでない者を繋ぐモノ。そして同時に、それらが繋がりにある証。それで繋がった者同士は引き寄せ合うし、それが切れた者同士は離れていく」

藤治が糸を持ち上げると二つのでてる坊主は体を寄せ合い、そのままの状態藤治が糸を切ると片一方は畳の上に落下した。

「引き寄せ合うというのは、何も物理的な意味のみを表さない。時としてそれは、両者の状況、状態を同期させること……つまり、片方が傷を負えばもう片方も傷を負うような状態も含む。龍二は、おそらく今この状態にある」

藤治は切れた糸を再び結ぶと片一方のでてる坊主の頭にペンで大きくバツを付け、同じようにもう片方の頭にも大きくバツを付けた。

「つまり、龍二はその縁？ で何かと繋がって、その何かの右目が見えないから、龍二の右目も見えないということ？」

リンの言葉に、藤治は頷く。

「おそらく、龍二の目は今、龍二が『妖精さん』とやらに使ったぬいぐるみの目の状態に引っ張られているんだろう。もう少し詳しく言えば、ぬいぐるみの中に閉じ込められて、今そのぬいぐるみを動かしている者にだろうが」

「まさか、本当に妖精がそのぬいぐるみの中に入ってるっていうの？」

リンが眉を顰(ひそ)めるのも無理はなかった。大抵あの手の「おまじない」は気の持ちようの問題で、大した効力はないと以前、藤治に教えられたからだ。

「さあ？ 妖精かどうかは分からんが、確実に何かしらは呼び出しているだろうよ。聞いたところ随分とデタラメでつぎはぎだらけの呪いだ。おそらく噂が渡り歩くうちにいろいろと付け足されていったんだろうな。普通ならまず成功することはないはずだが……こういうものは、何かの拍子に偶然が重なると、稀(まれ)に成功してしまうことがある。そして、この手のものはちゃんとした手順を踏んでいない分、解くことが非常に難しい。少なくとも、普通の方法では」

藤治はてるてる坊主を机に置いて、説明を続ける。

「だがな、普通は取らない……いや、普通の人間では取れない手段を使えば、面倒な手間を省いて解呪することができる」

藤治は、てるてる坊主たちを繋ぐ糸の結び目を指でつついた。

「ようは、縁を切れればいいんだ。縁が切れれば、繋がりは消えて感覚の同期も終わる。けど、縁を切るためには縁の糸を捉えなければならぬから、俺たちのような『観える』人間でないとまず使えない手段だ。しかも、その糸は酷く『観え』づらくて、『観える』人間でも道具も何も使わずに『観える』やつなんてほとんどいない」

「叔父さんには、その縁の糸は『観え』ないの？」

「そりゃあ、一番いい眼鏡をかけてよく目を凝(こ)らせば『観える』さ。だがな……今、その眼鏡は修理中だし、あれは一つしかない」

藤治は大抵いつも眼鏡をかけているが、その視力はそう悪いものではなく、むしろ他人よりいい方だ。その証拠に、彼の眼鏡に度は入っていない。しかし視力がそのまま「観る」能力に反映されるわけではなく、特殊な眼鏡を使うことで能力を補助している。その眼鏡にもいろいろあるようで、スペアも合わせて十数本が彼の部屋の戸棚に入っているのをリンは知っている。もっとも、彼はそれらをよく壊すしよくなくすので実際はもう少し本数が多いのかもしれないが。

「……この間のアレって、もしかして」



この間の朝の悲鳴と、割れた眼鏡をリンは思い出す。どうやらあれは彼が持つ中で一番よく「観える」眼鏡だったらしい。胡乱(うろん)な目で藤治を見るリンに、彼は自分の失態を誤魔化すように咳(せき)ばらいをした。

「とにかく、そういうわけだから今俺は縁の糸を『観る』ことができない。だから、お前の『目』が必要だ、リン」

「待って。確かにあの時一瞬だけ『観え』たけど、その後すぐに消えちゃったし、あれから一度もそんな糸『観て』ないし……」

「いや、一度『観え』たなら、もう一度『観る』のはそう難しいことじゃないはずだ。ただ、『観る』コツが分かっていないだけだ」

後で教えてやる、と藤治は言葉を続けた。

「じゃあ、その糸が『観え』たら、鉋か何かで切ればいいの？」

「いや、切るだけじゃだめだ。その糸の先にある相手を回収しないと。何かを取り憑(つ)いているぬいぐるみなんて、放置しておける代物じゃない」

「回収するって……糸を辿(たど)っていくつもり？」

そうリンが聞くと、藤治は首を横に振った。

「いや、確かにそういう方法もあるが……まあ、実際に糸に触ってみれば分かるさ」



翌日、夕方頃にもう一度龍二は琥珀堂を訪れた。今度こそ、その右目を治すために。

「よろしくお願いします」

父親に促されて、龍二は藤治に頭を下げた。しかし、藤治は首を振って「実は、君の目を治すのは私じゃないんだ」と言うと、扉の向こうの人物に声をかけた。

「……番？」

扉の向こうからやってきたリンに、龍二は目を見開いた。てっきり、治療は藤治がやるものだと思っていたからだ。

「何よ。何か文句があるなら言いなさいよ」

「いや、別に。ただ驚いただけ。番、昨日は治し方知らないって言ってたから、てっきり叔父さんがやるんだと思ってた」

「……不安とかないわけ？ 私で」

「全くないわけじゃないけど、別に手術とかするわけじゃないし……番でも叔父さんでもやる事は変わらないんだろ？ だったら別に、番で文句はない」

そう言って笑う龍二に、リンは照れ隠しをするように「じゃあさっさと座りなさいよ。立ってられるとやりにくい」と言い放った。

小上がりに腰をかけて両目を閉じた龍二。その右目の眼帯は外され、昨日と同じ黒い穴が口を開けている。それを見て一瞬ひるんだリンであったが、すぐに気を取り直して、縁を「観る」ために集中を始めた。

昨日の夜、藤治に教わった通りに、リンは目を閉じて息を止める。全身の神経を、シナプスの一つまでただ「観る」ことに切り替える。意識を深く沈め、ここにある身体など忘れて世界の枠の外に置く。自分は一人で映画館のシートに座っていて、真っ白な画面を観ているのを想像する。白い画面に、まず人間が浮かび上がる。次に動物、次に虫、次に植物。次に妖精、次に小人、次に体亡き人。白い画面が、次々と色で埋まっていく。立ち上がって、その画面に触れる。観賞を、干渉に切り替える。触れた手は画面に飲み込まれて、無数のフィルムが彼女の意識を呑む。その中で、彼女は確かに一本の糸を掴(つか)んだ。

目を開けて、リンは大きく息を吸った。無くなった酸素が、肺に補給されていく。そして、未だ黒々と龍二の右目を開く穴を見据えると、その中心から一本の白い糸が垂れていた。ほっと、安(あん)堵(ど)の息がリンの口から漏れた。それからリンは唾を飲み込んで、恐る恐るその糸を手取る。刺(し)繍(しゅう)糸ほどの細さのそれは思ったよりつるりとした肌触りで、触れた瞬間、リンは強烈な眩暈(めまい)を覚えた。

「痛っ！」

強制的に脳内に映像が流れ込んできて、頭がキリキリと痛む。映像はフラッシュ暗算の数字のように次々と切り替わった。最初は暗い部屋、次に神社の鳥居、どこかの草むら、アスファルトの地面、手入れの行き届いていない庭、そして最後に、リンもよく知っている橋の欄(らん)干(かん)が映った。

「『観え』たか」

糸を手放した直後、ふらつくリンの体を藤治が受け止める。

「……今の、何？ 何か、一気に頭の中にくつも風景が……」

まだ痛みの引かない頭を抱えながら、リンは藤治に尋ねる。

「おそらく、縁の糸に触れたことで、糸の向こうの相手と一時的に繋がったんだろう。何か映像が『観え』たなら、それは相手の見た景色かもしれない」

リンは最後に「観」た橋の欄干を思い出す。他の映像は少しぼやけていたりはっきりしないものもあったのに、最後の橋の欄干だけは妙にはっきりと「観えて」いた。

「橋の、上……もしかしたら、今、ぬいぐるみは橋の上にいるのかもしれない。そこだけ、妙にはっきりしてた」

「そうか……動けるか？」

支えている肩をぼんぼんと叩いて、藤治はリンの調子を聞く。

「なあ、番、大丈夫なのか？」

龍二が、心配そうな声で尋ねる。開けていいものなのかどうか分からず、未だその瞼は閉じられたままだ。痛みを訴えるリンの様子が見えないというのが、余計心配を招いているらしい。リンは正直まだ少し頭痛が残っていたが、それを龍二に悟られるのが嫌で「別にこれぐらい大丈夫だから、あんたは自分の心配でもしてなさい！」と声を張り上げた。

そして、藤治に体を支えられながら店の奥に入り、おまじないのぬいぐるみを回収する準備を始めた。



リンを心配する龍二とその父親を干也に任せて、リンと藤治は橋へと向かっていた。橋の近くに駐車場はないし、橋まではそう遠くないため、藤治はリンを背負って歩いて向かうことにした。

「頭痛はどうだ、引いたか？」

藤治の問いかけに、リンは頭を横に振る。

「まだちょっと痛い。ねえ、『糸に触ってみれば分かる』ってこういうことだったの？ こんなに痛いなら、昨日のうちに言ってくれればよかったのに」

不機嫌さを隠さずに、リンはふくれっ面でそう言った。

「その頭痛はまあ、今までにない情報量のものが頭に入ってきたことで脳が驚いているからだろうよ。そのうち慣れるし、何にしろいつかは経験するものだ」

藤治は、同じように「観える」人間だからと言って、リンに同情して甘やかすなどということとはしなかった。むしろ、どちらかというと厳しかった。「観える」ことに関するものであれば、それは一層顕著になる。同じような世界を「観て」きた先(せん)達(だつ)として、甘やかしては彼女のためにならないと思っているからだ。

「……叔父さんは、『観えて』よかったって思ったことって、あるの」

藤治の肩に顎を乗せながら、リンはなんとなくそんなことを聞いてみた。その問いに、藤治は一拍間を空ける。

「……さあ、な。いい事ばかりでもなかったし、悪いことばかりでもなかったな」

自らが積み重ねてきたものを振り返るように、藤治の目は遠くを見つめる。その声は哀しさと懐かしさが混じった、秋の風の音をリンに思い起こさせた。

「この『目』を全く嫌いだと思わなかったと言えは嘘になるが、結局これは自分の一部で、どうしようもないことだ。憎んだり嫌ったりするよりは、向き合って受け入れていく方が楽なんだよ」

そう言って、藤治はリンを背負いなおす。藤治の背に揺られながら、いつかそういうふうに見えるようになるだろうかと、リンは自問する。リンは自分の「目」が好きか嫌いかわねられたら嫌いだ。この「目」を持っていて良かったことなんてほとんどない。好きになれる自分なんて、想像がつかない。けれど、いつか藤治のように見えるようになればいいと、少女はそう思う。

そうやって藤治に背負われて、リンの頭痛が治まってきた頃、彼女はそれを視界に捉えた。橋の入り口、歩道の端に、何やらひよこひよこ動く茶色いものがあった。藤治もそれを見つけたようで、リンを下ろして二人で慎重に近づいていく。

近づいて見ると、それはハイハイをするように足を引きずる小さなディベアだった。よろよろと、よちよちと、足取りもおぼつかない様子で橋へ向かって這(は)っている。柔らかかったであろう小麦色の毛並みは地面と擦(こす)られて黒く汚れ、所々泥で固まっている。菓子箱から出るときにどこかで引っかけて取れたのか、右目のボタンは無く、白い糸だけが垂れ下がっている。右目の跡から延びた糸はリンたちの足元を越え、その遥か後ろまで続いている。つまり、縁の糸の先はこのぬいぐるみの右目跡に繋がっていたということだ。そしてそれは、このディベアが「妖精さん」に使われたぬいぐるみである、間違いのない証拠だった。

リンはよたよたと橋の中央に向かうぬいぐるみににじり寄る。片手には藤治から渡された糸切鋏が構えられ、よく研がれた刃が夕日を反射してきらりと輝く。それは、リンが藤治と家を出る前に彼から渡されたものだった。藤治曰く縁の糸は普通の鋏では切れず、その昔縁結びの神から預かることになったその糸切鋏なら切ることができるだろう、とのことだった。

ごくりと、リンは緊張から唾を飲み込む。何しろ相手は龍二の右目を見えなくした者だ。見た目はボロボロのぬいぐるみだが、中に何が入っているのかまではリンも知らない。中身が何か分からない以上警戒はするべきであるし、見た目に惑わされてはいけないことなど今更の話である。思わず手に力が入りそうになるのを堪(こら)えて、リンは獲物を狙う猫のように姿勢を低くする。目標まであと一メートル。左足に力を籠(こ)める。ざり、と砂が音を立てた。風が、リンの背を押す。

「……それっ！」

掛け声と共に少女の細い脚に籠められた力は一気に解放され、少女は一気に地を蹴って相手に飛び掛かる。左手が小麦色の毛並みを捉え、地面に縫い付ける。アスファルトと擦(こす)れた親指が、少しヒリヒリとした。捕らえられたクマのぬいぐるみはリンの手から逃れようと、精一杯足をばたつかせて抵抗する。それを逃さないように、リンは左手にぐっと力を籠めた。そして右目から延びる縁の糸を、右手の糸切鋏で根元から断ち切る。

「……やった！」

少女の高い声が、珍しく喜びに沸いた瞬間であった。これで、龍二の目は再び見えるようになるはずだ。それまで彼女と運命を共にしてきたおぞましい視界。どうやったって変えることができないもの。今までただ膝を抱えてうずくまることしかできなかったもの。いつどこで周りの誰かを傷つける羽目になるか分からないもの。それを初めて、誰かの役に立てることができた。それが自分の愚かさによって引き起こされたことを解決するためのものであれ、リンは嬉しかった。久しぶりに、ただ素直に嬉しいと思った。安堵に満ちた顔でリンは立ち上がり、ぬいぐるみを持って藤治のもとへ駆け寄ろうとした。

しかし、喜びが彼女を無防備にさせたのか。それともこれもまた逃れられない、彼女の「目」が呼び起こしたものなのか。喜びもつかの間、彼女を先ほどよりも強い目眩が襲う。

「……うっ！」

あまりにも強いそれに、リンは頭を抱えてその場にうずくまる。頭に釘でも打たれているんじゃないかと錯覚するぐらい、脳全体がガンガンと痛みを訴える。呼吸も普段よりずっと速い。速すぎて逆に息が詰まりそうだった。段々と意識は遠のき、目を開けていられなくなる。夕日が涙で滲(にじ)む。藤治が彼女の名前を呼ぶ声が聞こえた気がしたが、それもはっきりとは聞こえなくなり、リンの意識は暗闇に吞まれていった。



リンが目覚めるとそこは、ただ暗闇のみがある空間だった。いや、実際リンには自分が瞼を開いているのかどうかさえ分からなかった。自分に瞼という器官が存在しているのかどうかさえ曖昧(あいまい)だった。ただ視界に光はなく、どうにも様々な感覚がはっきりとしない。リンはそっと手を開いたり握ったりしてみた。正確に言えば、そうしろと脳らしきものから手らしきものに命令を下した。リンは五本の指らしきものがゆっくりと動き、掌(てのひら)らしきものに触れるのを感じた。どうやら、ちゃんと触覚はあるらしいことが分かった。

触覚があるのならと、リンは腕らしきものを動かしてみた。しかし、周りには何もないようで、手らしきものに触れるものはなかった。次に彼女は声を出そうとしてみた。しかし、足を手に入れた人魚姫のように、喉らしき器官から零れる声はなかった。

他に彼女に分かることと言えば、音だけはちゃんと聞こえているということだった。ト、ト、ト、という音がリズムをとっているのがはっきりと聞こえた。それはよく聞きなれた音のような気がするのに、身近すぎて何の音だか分からない。そういう音だと彼女は思った。その他の音は水の膜(まく)の向こう側にでもあるように、ぼやけて聞こえていた。水の中……そう、そこは水中に似ている気がした。そういえば、なんとなく体が軽い気がする。そう思った直後、彼女に触れるものがあった。

——ぺたり、ぺたり。

それは、今の彼女に体があるのなら、膝の辺りに張り付いた。

——ぺたり、ぺたり、ぺたり。

それは、現実の彼女の拳(こぶし)よりも小さく、ひんやりとしていて、なんとも言えないぬめりがあった。

——ぺたりぺたりぺたりぺたり。



右耳に兄の声が届いて、それから扉を開ける音と足音が響いた。バタバタと忙(せわ)しない音が遠くなっていく。ぼんやりする頭でそのまま天井を見つめていると、今度は落ち着いた二人分の足音が近づいてくるのが聞こえた。

「調子はどうだ？」

そう言って、藤治はリンの頬をつねる。

「いひゃい」

「よし、まあとりあえずは大丈夫そうだな」

ほっと、藤治の口から小さく息が漏れる音がした。ああ、心配をかけてしまったと、リンはぼんやりと考える。藤治はリンの頬を離すと、彼女の傍に座る。

「叔父さん、あのぬいぐるみと糸切鋏、ある？」

身じろぎをして叔父の方を向くと、リンは寝起きのかすれ声でそう尋ねた。

「ああ、持ってきた」

藤治が横に立つ千也に目(め)配(くば)せをすると、千也は静かに頷いてバスケットを彼に差し出す。差し出された藤(ふじ)蔓(つる)のバスケットを受け取ると、藤治はその中からポロポロのティディベアと銀色の糸切鋏を取り出してリンに差し出す。リンはゆっくりと体を起こすと藤治からそれらを受け取り、ぬいぐるみの腹に縫い付けられた赤い糸を切った。どうしてかは分からないが、そうしなければいけない気がした。ぬいぐるみのクマはもう、死んでしまったかのように動かなかった。開かれたティディベアの腹からは、ポロポロになった紙の人形が取り出された。水に濡れたように書かれた字は滲み、すでに見えなくなっていた。

「……叔父さん、結局あれは何だったの？」

ぬいぐるみの腹の傷を撫(な)でながら、リンは藤治に尋ねる。

「さあ？ 俺は『観て』いないからな」

藤治はリンの問いに、そう答えて肩を竦(すく)めた。リンもそう言われると、それ以上は詮(せん)索(さく)しようとは思わなかった。あのヒトガタたちと赤いワンピースの女性は何だったのか。それが全く気にならないわけではないけれど、ああいうものに深く関わらない方がいいのはリンもよく知っているからだ。そして藤治はそんなリンの様子を見て、今度は彼がリンにこう問いかけるのだった。

「……『観えて』、よかったか？」

そう問う叔父に、リンは首を横に振る。

「……分からない。あれが良いものなのか、悪いものなのかも」

けれど、それでも少しだけ、リンはその胸が軽くなったような気がした。それまで彼女の心に茨(いばら)のように絡みついていた「観える」ことへの嫌悪感。それが、数本取り払われた。例えるならそんな気分だった。

それから少し雑談をして、藤治と千也はリンの部屋を出た。

「……で、リンは一体何を『観た』の？ 知ってるんでしょ、叔父さん。大体、リンが倒れるなんて……そんな危険なもの、なんでリンに任せたの？」

怪訝(けげん)そうに眉を顰(ひそ)めて、千也は藤治にそう問いかけた。

「それはな、あれはそう危険なものじゃなかったからだ」

「危険なものじゃない？ けど、リンは倒れたんだよ？」

千也は自分よりも頭二つ分背が高い藤治を見上げて言う。

「あいつが倒れたのは仕方ない。今までにない情報に出会って、脳が混乱したんだろう。俺だって初めてあの糸を見たときは丸一日寝込んだものだ。リンはまだ回復が早い方だよ。何にしろ、遅かれ早かれあいつは縁の糸を『観る』ようになったら。なら、最初に『観る』のはまだああいう敵意のないものの方がいいだろう」

藤治は一度立ち止まり、後ろにいる千也の方を振り返る。

「敵意がないって？」

「あのぬいぐるみの中に入っていたものはな、おそらく水子だ。よく『水子の祟りが』などと言われるが、本来水子は自ら積極的に他者に害を加えるようなものじゃない。そも水子とは母体に宿ってから生まれる前までに命を落とした者。この世の何物にも触れることなく終わった命。だから、その存在は穢(けが)れを知らない、ある意味この世で最も純粋なものだ。龍二の目が見えなくなったのはあの『おまじない』で縁が繋がってしまったことが原因だしな」

千也は、今は自分が持つ籠の中にあるティディベアを見た。これから洗って、腹の傷もちゃんと縫ってやる予定だ。

「大体、あの龍二について言うとな、俺はあいつがつかまり立ちをしていた頃から知っているがな、あれは『零感』だ。本人に自覚はないだろうが」

「靈感？」

突然出てきた言葉を、千也は聞き返す。

「ああ、お前に言ったことはなかったか。霊に感じると書くやつじゃないぞ？ ゼロに感じると書いて『零感』だ。要は俺やリンとは反対に、全く『見えない』人間のことだ」

「それって普通とどう違うの？」

首を傾げる千也に、藤治は説明を始める。藤治曰く、「零感」とは、時間、場所、状況に関わらず、文字通り「全く」「見えない」ということであった。普通の人間でも一定条件が揃(そろ)えば幽霊や妖精を「見る」ことはできる。だが「零感」の人間は、どれだけ好条件が揃ってもよっぽどのことがない限りそれを「見る」ことがない。藤治に言わせれば、おそらくほとんどゼロと言ってもいい、とのことであった。

龍二の場合は元々体質的にそれに近いものがあるが、生まれつきかなり強力な加護がついていた。それはおそらく、彼の家が祭る神、もしくはそれに匹敵する力を持ったものからのものだ。普段人ならざる者を「見」ない人間が、ふとした瞬間にそれらのものを「見て」しまう理由の一つとしては、「見る」ことで人ならざる者からの攻撃を避けられるようにするというものがある。だが、彼の場合はそもそも加護が強すぎて避ける必要がないのが大きいのだろうと藤治は睨んでいる。

「それでもあいつが今回『おまじない』の影響を受けたのはあいつが自分で『おまじない』をしたのもあるが、相手が穢れを知らず敵意を持たない水子だったのもあるんだろうよ」

「じゃあ、龍二君がリンの『観て』いるものを見ようとしておまじないをしたのって……」

千也の言葉に、藤治が深い深いため息をつく。

「ああ、全く意味がない。だからこれは本当に馬鹿馬鹿しくて人騒がせな話なんだよ」



リンが縁の糸を切った瞬間、それまでかけてあった目隠しが外れたかのように一瞬で龍二の視界が晴れた。その後意識を失った状態で藤治に背負われて帰ってきたリンを見て、心配した龍二は自分もリンが目覚めるまで待つと言った。しかしもう日が暮れ始めているからと父親に連れられて帰ることになった。

その次の日、龍二はリンと話がしたくていつものように登校時に彼女に話しかけようとした。しかしリンは以前よりも頑(かたく)なに龍二との会話を拒み、彼の姿を見つけるとそそくさと逃げてしまう。それでも諦めず、龍二はその次の日も、何度もリンにしつこく話しかけようとした。そして水曜日の下校時、あの橋を渡った先でリンを待ち伏せ、やっとまともに彼女の顔を見ることができた。

夕暮れ時の茜(あかね)色の世界に、少し遠くから豆腐売りのワゴンの、高い音が響いている。橋のわきから飛び出して、通せんぼうをするように両腕を広げた龍二に、リンはぎょっとして目を見開く。対する龍二は、特に怪我もなく顔色も良さそうなリンの様子を見てほっと胸をなでおろした。あの日、藤治に背負われて、体の力全てが抜け去ってしまったようなリンを見たときから、龍二はずっと彼女のことを心配していた。一言でもいいから彼女に礼が言いたかった。だから月曜日に学校に行くまでの間、どこかに彼女がいなくて周りを見回したり、着いてからもすぐにリンを探しに行った。

しかし、やっと見つけたと思ったらすぐに彼女は逃げてしまった。何度話しかけようとしても、彼の顔を見るなり、オオカミを見つけた野(の)兎(うさぎ)のように素早く身を隠してしまう。そしてこの時も、リンは彼を振り切って逃げだそうとした。

「ちょっと待てよ！ なんで逃げるんだよ！」

龍二の手が、逃げようとするリンの赤いランドセルを強く掴んだ。それでも二度三度、リンの足は前へ進もうとした。しかしそれに負けじと龍二の手力も強くなり、ついには両手で彼女のランドセルを掴んだ。それで観念したのか、ため息をついてリンは足を止めた。

「なんでって……そっちこそ何よ」

リンは、龍二の方を振り返ることさえしなかった。その声に、以前橋の上で彼と言いつつ時のような威勢はない。

「……私に関わると碌(ろく)なことがないって、もう分かったはずでしょ？」

十一月中旬の、冷たくなり始めた空気が彼女たちを包んでいた。ランドセルの肩(かた)紐(ひも)を、リンはぎゅっと握りしめる。彼女はもう、決めたのだ。二度と彼を巻き込まないと。

「あなたの目が見えなくなったのも、そもそも私があんなこと言わなかったらあなたも何もしなかったでしょ？」

後ろから風が吹いて、リンの二つ括(く)りの髪が彼女の表情を隠すようになびいた。ごわごわとして乾いたその風の音は、彼女の声の震えをもみ消した。

「もう、こんな目に関わらない方がいい。あんなもの、あなたが『観る』必要なんてない」

そう言って、リンは龍二を置いて歩いて行こうとした。夕焼け色の空気の中に溶けるみたいに、小さな背がさらに小さくなっていく。遠くなっていく。振り返ることはない。何とかしなくちゃいけない、けどきつと、彼女は追いかけてもまた逃げるんだろう。そう思うと、龍二は駆けだしそうになる足をぐっと踏ん張った。そして代わりに、肺いっぱい空気を吸った。

「オレは！」

遠ざかる背中に、龍二の大きな声が響く。電柱の上のカラスが、バサバサと音を立てて飛び去った。

「……オレは、お前の目が綺麗だと思う！」

さらに肺に空気を貯めて、腹の底から龍二は叫ぶ。

リンの足が、止まった。

「オレは、お前に幽霊とか、そういうものが見えてよかったと思う。だってその目があったから、オレの右目は治ったんだろ？ 『こんな目』なんて、言うなよ」

龍二が、一步、また一步とリンに歩み寄る。ざりざりと、アスファルトの上の砂が音を立てた。

「番、オレは諦めないぞ。絶対諦めない。いつかお前の隣でお前と同じものを見るまで、絶対に諦めない。意地でもなんでも」

そう言って、龍二はリンの小さな背中を睨んだ。その目には強い意志が宿り、一步も引き下がらないとでも言わんばかりだった。

「なんで、そんなこと言うの」

リンが勢いをつけて振り返り、彼女の髪が宙を舞う。

「なんで、そんなに『観よう』とするの……！ あんたにはきつと一生、私と同じものなんて『観え』やしない！」

リンは吼(ほ)えるように叫んだ。その言葉は、以前彼女が龍二に言った言葉だった。けれど、今回その言葉が背負う意味は以前よりも重い。あの時はリンと同じものを「見る」ということがどういうことかも分からずに、そしてどうせ誰もリンと同じ世界を「観る」ことなんてできやしないのに、あんなことを言う龍二が腹立たしかった。こちらが巻き込まないようにしているのに、それを無視して踏み込んでくる彼に苛立った。そうして、カッとなって言った言葉だった。けれど、リンは聞いたのだ。彼の体質について。

月曜日の朝、リンは藤治に、今回のことで龍二は「見え」てしまうようにならないだろうかと尋ねた。今後彼の目に影響はないのか、心配になってのことだった。すると、藤治はこう答えた「あいつは体質的に、これからも一生俺たちと同じものを『見る』ことはないだろう」と。それから、それを彼自身は自覚していないと。零感という体質についてはリンも以前聞いたことがあった。けれど、まさか彼がそうだとは思いつかなかった。

彼の体質のことを聞いて、リンは少しだけ安心した。彼が自分の目に映る化け物たちを「見る」ことはないのだと。そしてなおさら彼を巻き込んではいけなと思った。「観え」ない彼に、自分と関わることで恐ろしい事件が起こるなんて、もうあってはならないことだと思った。同時に少しだけ胸が痛んだのには、気付かなかったことにした。

だからこそ、リンは再び龍二の言葉に苛立った。どうせ「観え」やしないのに、そしてせつかく「観え」ないというのに、「観る」ということがどういうことなのか体験したはずなのに、それでも「見よう」とする彼に。隠すものもない彼女の目は、龍二と同じだけの強さで彼を睨んでいる。夕日に照らされる二人の姿は、決闘を迎え向き合う西部のガンマンたちに似ている。

「……だって、寂(さび)しそうだったから」

風だけが轟々と野次を飛ばす中、口を開いたのは龍二だった。

「お前はすごく強いのに、寂(さび)しそうだったから」

龍二が初めてリンに会ったのは、彼女たちが夏に越してきて数日たった後。藤治や干也と共に彼女が龍二の家の神社に挨拶(あいさつ)に来た時だった。

龍二が学校の水泳教室から帰ると、玄関に龍二もよく知る父親の友人がいた。そしてその隣に、中学生ぐらいの少年と、自分と同じぐらいの歳の少女がいるのが目に入った。少女は栗色の髪を頭の上の方で二つ括りにして、白い肌に薄いブルーのワンピースがよく似合っていた。三人はどうやら龍二と入れ替わりにもう帰る様子で、互いに軽く挨拶をしてすれ違った。すれ違いざまに、少女のつり目がちな目が一瞬だけ龍二の目と合って、すぐになんでもなかったかのように逸らされた。

次に龍二がリンに会ったのは十月のはじめ、学校の図書室だった。放課後友人と校内でかくれんぼをしていた龍二は、何か隠れるところはないかと図書室に入った。放課後と言っても日も傾き始めた時間、人もまばらな中、少女は窓際の席にいた。いくつか並んだ本棚の陰から、龍二はなんとなく彼女のことを見ていた。少女の目は窓から差し込む夕日に、オレンジの光を帯びていた。龍二はそれを見て、少し前に社会科見学で行った博物館で見た、琥珀のようだった。今はもう人間が見ることのない、古い古い忘れ去られた時代のものを閉じ込めた、あの美しい石のようだと。思わず見惚(みぼ)れてしまうぐらい、少女の茶色に近い濃(のう)褐(かつ)色(しよく)の瞳は綺麗だった。

その目に緊張が走って初めて、龍二は彼女の目に見とれていたことに気が付いた。少女の瞳は窓の外の何かを見つめ、白い頬は見る見るうちに青ざめていく。そして急いで目をつぶると、縮こまるように俯いて、じっと耐えるよう

に体を固くした。少女の手は小さく震えて、汗が机にぼたぼたと落ちていった。何にそんなに怯えているのかと龍二も窓の外を見てみたが、そこには夕焼け空以外には何も見えなかった。

それから少しして、龍二はこんな噂を聞いた。五年二組の番リンには、幽霊が見えるのだと。番というのが龍二の父親の友人の苗字だと噂と記憶が繋がった時、番リンとはあの少女のことなのだろうと龍二は思った。同時に、あの時の少女がどうして怯えていたのか、やっと納得がいった。きっとあの時、彼女は自分の目には見えない者と対(たい)峙(じ)していたのだろうと。

「なんて強いんだろう」

リンの事情を推測して、それが本当なら彼女はなんて強いだろうと、龍二は思った。きっとあの時、彼女と同じものを見た子はあの場に一人としていなかった。みんな何も知らずに、彼女以外は平穩の中にいた。彼女だけが、彼女にしか見えないものと対峙(たいじ)していた。悲鳴すらあげずに、ただじっと耐えていた。

「なんて寂しいんだろう」

同時に龍二は、彼女はなんて寂しいのだろうと思った。あの日彼女がたった一人で耐えるしかなかった。一緒に身を寄せ合う相手すらなく、彼女の世界は彼女ただ一人だけだった。今までずっとそうだったのなら、それはなんて寂しいことなのだろうと、彼は思ったのだ。

だからだろうか。彼が、彼女の見ている世界を見てみたいと思ったのは、いつか彼女の隣で彼女と同じものを見て、一人ではないのだと安心させたいと、龍二は思ったのだ。

「お前は、オレにはお前と同じものなんて一生見えないって言ったけど、それでもオレはこれから先、見ようとするをやめようとは思わない」

胸を張って、龍二はリンにそう宣言した。

例え彼女の見ているものを見るができなかったとしても、それを理由に見ようとしなのは間違っているのではないか。できるまでやってみないと本当にできないかなんて分からない、龍二はそう思っているからだ。

「そんな……それだけで？」

信じられないとでも言いたそうに、リンはそう呟いた。その呟きに、龍二は唇を尖らせる。

「番にとっては『それだけ』なんだろうけどさ、それで何か悪いかよ。それに、一応他にも理由はあるんだぜ？」

そう言って、龍二は少しリンから目を逸らす。

「番はさ、オレの目の色を見ても、何も言わないだろ？」

「……は？ 目の色？」

意外な言葉が聞こえて、リンはぱちぱちと瞬きを繰り返した。

「そ、オレの目の色、みんなとは違うからさ。それがちょっと、嫌だったんだ」

龍二の母方の祖母は、実のところイギリスの出身である。龍二の目の色もその祖母の血をついで、日本人にしては色素が薄く、緑色に見えることがある。小さい頃からそのことだからかわれることが度々あった龍二にとって、自分の目の色はちょっとしたコンプレックスであった。例え褒められていたとしても、彼は目の色のことを言われるといつも居心地が悪かった。まるで、お前は他人とは違うのだということを突き付けられて、仲間外れにされているみたいだからだ。それでも、龍二はそれを笑って誤魔化してきた。

あの日、初めて二人の目が遭(あ)ったあの日。リンは龍二の目に一瞥(いちべつ)をくれただけで、何もなかったかのように去っていった。あれだけ自分の目の色に対して何の興味も持っていない視線は、龍二にとっては初めてのことだった。だから龍二はリンのことがどうにも気になってしまった。そして彼女の事情を知って、笑って逃げた自分と比べて、じっと一人で耐えることができるリンのことを強いと思ったのだ。

「なんか、お前がオレの目の色の事全然気にしないからさ、これぐらい全然普通の事なんだって、ちょっと思えたから。オレからも、お前に何かしてあげたらって思ったんだ」

そう言って、ちょっと恥ずかしそうに笑う龍二の目は、夕日に当てられて確かに緑色に光っていた。

(そんなこと)

そんなこと、リンは知らなかった。リンは龍二の顔なんて、じっくりと見たことがなかったからだ。いつも話しかけられても関わり合いにならないようにすることで精一杯で、彼の事をちゃんと見るなんてなかった。

(ああ、見えていなかったのは、私の方だったんだ)

理解なんてされないと思いながら、結局理解しようとさえしなかったのは自分なのだと、そのときリンは悟った。なんだかおかしいことかもしれないけれど、目から鱗(うろこ)が落ちるような気分だった。何かが胸にすとんと落ちて、その時、リンは瞬(まばた)きを忘れた。遠くの山脈からやって来たであろう風が、びしばしと眼球にあたって、少し痛かった。それから沸(ふつ)騰(とう)直前のお湯にぽつぽつと水泡が沸き上がるように、少しずつ恥ずかしさがこみ上げてきた。



リンは自分のこの「目」の全てを、理解されたいとは思わない。理解されることでその人が傷つくなら、きっと理解されない方がいい。けれど、そのために他人全てを遠ざけて、理解しようとさえしないのは本当に正しいことなんだろうか。うまく説明はできないけれど、それは理解できないからと無意識にリンを恐れて責め立てた祖母と、結局は同じなんじゃないだろうか。リンは、それまでの自分の在り方について自問自答をする。

「私も、お前も、誰一人として同じ世界を見ている人間なんていないんだよ」

いつか祖母の家で聞いた藤治の言葉を、リンは思い出す。人間は、誰一人として同じ世界を見ていない。あの時は、リンと藤治のことを言っているのだと、彼女は思った。けれど今は、決して二人の事だけを言っているのではなかったのかもしれないと思えた。背の低い人がヒールの高い靴を履(は)くと世界が違って見えると言うように、「観え」ない人間であっても、誰一人として同じ世界を見ている人間なんていないのだと。藤治はあの時、そういうことを言いたかったのではないかと、今のリンは思う。

(なら、龍二には一体、何が見えているんだろう)

その緑の目で、彼が見る世界は一体どんなものなのだろう。リンの「観る」世界を見たいというのに、決してそれを見ることなどできない彼の視界には、何が映っているのだろうか。夕日は赤いだろうか。桜は薄桃色だろうか。視界の端に映る川面(かわも)は、輝いているだろうか。

そんなふうにいるのを知られるのもなんだか恥ずかしくて、リンは龍二に背を向けた。けれど足は止めたまま、リンは帰路へと歩みを進めなかった。しばしの沈黙の間、橋の下を流れる川は、風に撫でられてきらきらと輝いていた。

「……この間の、あんたに『観え』たらってやつ、結局『観え』たの？」

リンがそう問いかけると、龍二は「見えなかった」と気まずそうに首を横に振った。

「じゃ、あれ、無しにしてあげる。……結局、私のせいであんたの目、見えなくしちゃったし」

リンは感情を誤魔化すように弾みをつけて話したはずなのに、最後の方はなんだか声が弱くなってしまった。それが気に入らなくて、足元の小石を一つ、ぽんと蹴りあげる。

「だから、それについてはお前が治してくれたし、お前だけのせいじゃないだろ？ 結局どっちも悪かったんだろって、番のそこから帰った後に父さんに言われた。オレも、そう思う」

そう言う龍二はさらにバツが悪そうで、なんだか雨の日にイタズラをして外に追い出されて、ずぶ濡れになった犬みたいだった。

「……じゃ、『妖精さん』に何をお願いしたのか、教えてくれたら無しにするわ」

少し考えてから、リンはそう言った。龍二のぬいぐるみから出てきた紙は字が滲んでいて、彼が何を願ったのか分からなかった。あの時はそれを特になんとも思わなかったが、なんだか今になって急に気になってきたのだ。それに対して龍二は何か言いたそうにもごもごと口を動かしていたが、やがて大人しく口を割ることにしたようだった。

「……『番と仲良くなりたい』だよ」

恥ずかしそうに、龍二は頬を掻(か)いてそう言った。

「は？ 『妖精を見たい』じゃなくて？」

意外な言葉にリンの声は上ずった。てっきり、リンと同じものが「観える」ようになりたいと願ったのだと、そう思っていたからだ。

「いや、それは呼び出した『妖精さん』を見ればいいし、カメラだって用意したし、番と言いつつままだったし、仲良くしたいっていうのは本当だし……」

龍二は照れくささからか、いつものハツラツさもどこかに隠れて、なんだか歯切れの悪いような言い方になってしまった。なんだかそんな彼の様子がおかしくて、リンは声を出さずに息だけを漏らしてクスリと笑った。

「リンでいい」

「は？」

今度は、龍二が間抜けな声をあげる番だった。

「番だと、兄さんと叔父さんもいるから」

そう言うリンは、振り返って無言で手を差し出す。差し出された手の意味が分からず、龍二がリンの顔と手を交互に見比べていると、「帰るんでしょ」と仏(ぶつ)頂(ちよう)面(づら)で呟いた。それを聞いた龍二はたちまち笑顔になって、リンの手をとる。夕焼けはさらに赤く、日は黄昏(たそがれ)色に染まる。家路を歩くリンの目は、琥珀のように輝いていた。



「事実は小説より奇なり」という。

当たり前だと、少女は笑う。

事実、どんな文字書きであれ、他者の視界を完璧には表現できまい。

だって、結局同じ世界を見ている人など、ただの一人もいないのだから。

それでも人は、他者の視界を理解することを怠(おこた)ってはいけないのだから。